
ポケットモンスター センチメンタルブラウン

結城白羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター センチメンタルブラウン

【Nコード】

N5367I

【作者名】

結城白羽

【あらすじ】

十歳の誕生日を迎えた少年ソラトは、ポケモンマスターを目指すため故郷の町を旅立つことに。胸が高鳴り、これから何が待っているのか楽しみ！でも初めての手持ちポケモンはちょっと性格に問題があつて、うまくやっていけるか不安でいっぱい。果たして、彼はポケモンマスターになることができるのかな？不器用で、でもポケモンが大好きな少年の冒険譚をお楽しみ下さい。

序章・旅立ちの日・（前書き）

ソウルシルバーを買って、今ポケモンに魅力に夢中です。

でもあまりポケモンは詳しくないので、結構設定とかは妄想で補っています（汗）

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

序章・旅立ちの日・

まだ冬の残滓^{ざんし}が漂う空気は、肺に取り込むと不思議と心地よいものになる。

ベットから起きだすときは大敵なのに、今は一片のうとましさも感じない。

それは、身体が少し火照^{ほて}っているからだろうか。
希望と興奮、あるいは不安で。

「ママ、行ってくるよ」

顔をくしゃつと歪め、ソラトは玄関先の母に手を振ってみせる。
それに応えるように、母はゆっくりと彼に近づき頬を撫でた。

「いつかこの日が来るのはわかってたけど………ときが経つのは早いものね」

「それ、昨日も言ってたよ」

「ふふっ、さびしさを紛らわすための呪文なのよ」

そう言って、乱れてもいないのにソラトの着衣を一つずつ正していく。

頭に巻いたストライプ柄のバンダナ。

青のスラックス。

黒いシャツに、その上から羽織った白のジャケット。

そして、傷おろかくすみ一つない手袋とスニーカー。

彼が身につけている衣類の全てが全て、今日のために母が用意したものだっただ。

今日はソラトの十歳の誕生日。
旅立ちの日。

「その姿を見てると、何だか若い頃のパパを思い出しちゃうわね」

「パパもこんな感じだったの？」

「ええ、出会った頃はね」

「へー」

確かめようにも、父は仕事の出張で今、別の地方で生活している。PCTELを使えば連絡を取れないこともなかったが、わざわざそのためだけに呼びだすのは気が引ける。

何より、昨日のうちに旅にでて頑張ってみせると宣言したのだ。今さら、顔を合わせずらい。

だって、男の子だから。

「さて、それじゃあ行ってらっしゃい」

母は無言を言わず彼を後ろに振り向かせ、リュック越しに背中を軽く押す。

その意味を幼いながらも感じ取り、しかし振り向かない。ただ、ソラトはしっかりと頷いてみせる。

「うん」

そして、渾身のガッツポーズを作ってみせた。
見送る母に、できるだけ心配をさせないように。

「いってきまーす！」

澄み渡った晴れ空の下、十歳の少年は旅立つ。
そう、ポケモンマスターになるために。

ポケットモンスター。

略してポケモン。

それは、この星で人間たちと暮らす不思議な生き物たちのことだ。
あるときは人と仲よく、あるときは人に牙を剥く。

長い長い歴史の中で彼らは人と共棲し、そして人と共に繁栄して
きた。

そんなポケモンと人間の関係を体現する者たちがいた。

ポケモントレーナー。

彼らはポケモンと共に同じ時間を共有し、ポケモンと共にたくま
しく育っていく。

トレーナーは互いのポケモンを戦わせて競い合い、仲間の輪を広
げていく。

そして、目指すのだ。

最高のポケモン使いであり、ポケモントレーナーの頂点。

そう、ポケモンマスターを。

これはポケモンマスターを目指す一人の少年、ソラトの物語であ
る。

序章・旅立ちの日・（後書き）

本作を読んでいただきありがとうございます。
ソラトの冒険を暖かく見守ってやってください。

第一話・初めてのポケモン・（前書き）

オリジナルの地方が舞台です。

既存じゃないとちよつと大変かも、とか今更ながら思ってます。
少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第一話・初めてのポケモン・

「えっほ、えっほ」

ソラトの住むミシマタウンは、広大な湖を囲うようにして町並みが形成されている。

湖の西が森に面しており、上空から眺めた町はまるで半分に分かれたドーナツツのように見えなくもない。

ソラトはそんなドーナツツの湖沿いにある、草を刈っただけの道を駆けていた。

目指す場所はこの道の終点、トウヤ博士の研究所だ。

この国では、十歳になるとポケモントレーナーになることが許される。

ポケモンを所持し、共に旅をすることが認められるのだ。

そこで、ソラトはかねてからトウヤ博士にお願いをしていた。

十歳になったらボクにポケモンをください、と。

それが、今日だった。

「ふふっ」

母親ゆずりの笑みをこぼし、ソラトははやる気持ちを抑えきれない。

嗚呼、ドキドキする。

ボクの初めてのポケモンだ！

と、不意に湖のほうから何か水音がした。

ソラトはそちらを見ないでも、その正体がすぐにわかった。でも、しっかりとそちらに目を向ける。

まだ低い太陽がまぶしい湖面から、何か突きだしていた。きれいな純白のツノだ。

「トサキント、おはよう！」

そう挨拶すると、白い身体に赤い模様がチャームिंगなポケモンが湖面に姿を表した。

トサキントだ。

ソラトが初めて友達になったポケモンだ。

「ボク、今日ポケモントレーナーになるんだ。ねえ、すごいでしょ？」

ソラトと併走するようにゆらゆらと泳ぐ金魚型のポケモンは、立派なツノを上下に動かしてみせる。

彼にはそれが頷いた仕草だとわかる。

もう五年近く一緒にすごしてきたのだ。

これぐらいの意思疎通はお手のものだった。

「応援してくれる？」

ツノが上下に動く。

「本当に？」

ツノが上下に動く。

「ボクがいなくなったらさびしい？」

ツノが上下に動く。

「じゃあ、ボクと一緒にくる？」

今度は、ツノは動かなかった。
たぶん、そうだろうと思っていたので、ソラトは驚かない。
このトサキントは、ミシマタウンの静かな湖が大好きだから。
最近、コイビトもできたみたいだしね。
やっぱり、離れたくないよね。

「今度、ボクがこの町に帰ってきたとき、また会ってくれる？」

ばしゃりっ、と水しぶきが飛び散るほどのそれは強い頷きだった。
にんまり、と頬が緩む。

「元気でね、バイバイ！」

ソラトが走りながら手を振ると、トサキントは泳ぎながらツノを振ってくれた。

そして、高々と湖面を飛び跳ねると、どこかへ泳いで消えてしまった。
っ。

少し涙がこみ上げてきそうになったけど、我慢する。

これくらいで泣いていては、とてもポケモンマスターになれない気がした。

ソラトがしばらく走り続けていると、途中で何人かとすれ違う。
小さい町だから、知らない人はいない。

向こうも、こっちを知っていた。

あら、もうソラトちゃんも十歳なのね。

つらいときはいつでも戻ってきていいんだぞ。

大変だろうけど、頑張ってるっしょい。

皆、それぞれがソラトのことを応援してくれる。

それがうれしくて、彼の駆ける足はますます速くなった。

そして、トウヤ博士の研究所に着いた。

白塗りの大きな建物だ。

機能性重視の増築を繰り返しているせいか、外装はかなり歪な感じが否めない。

ただし、ここエイレン地方では知らない者はいないぐらい高名な研究施設で、ミシマタウンといえばトウヤ博士の研究所、というぐらい有名だった。

ソラトは飛び込むようにして研究所のロビーに入る。

「こんにちはッ、トウヤ博士にポケモンをいただきに参りました！」

ロビーのすぐ奥がもう研究室で、多くの研究員がきよとんとこちらを見ていた。

声の主がソラトだとわかると、彼らはみんな事情を飲み込めたように微笑ほほえんでくれた。

顔なじみなのだ。

この研究所は、ソラトの遊び場でもあった。

あまり同年代の友達がいらないソラトは、昔からよくここに遊びに来ていたのだった。

「博士なら奥にいるわよ」

一番近くにいた女性研究員が、奥にある個室を指さした。

窓にブラインドカーテンが掛かっているそこは、所長室だ。

トウヤ博士の肩書きは、こここの所長だった。

「わかりました！」

ソラトは駆け足で研究員たちの脇を通り抜け、奥の所長室の前までたどり着く。

スーハー、と一度深呼吸をし、扉をノックをした。

「トウヤ博士、ソラトです！」

しかし、部屋から反応が返ってくる気配はない。

「……失礼します」

仕方ないので、ソラトは勝手に扉を開けて中に入った。

小さな室内は、アンティーク調で統一されていた。

一世紀以前のものだとわかる調度品の数々が、部屋を落ち着いた雰囲気に飾っている。

博士の趣味だ。

そんな部屋の奥、木製の大きな机を前に人影があった。

重厚な革張りの椅子に座っているのは、白衣を着た一人の老人だ。髪のひとつが白髪で、気むずかしそうな顔立ちをしている。

机に肘をつき、ぎろりとした眼差しをこちらに向けていた。

「トウヤ博士、こんにちはッ！」

ソラトはにっこりと笑いながら挨拶する。

しかし、トウヤ博士はぴくりとも動かない。

まるで氷漬けにでもされたかのようにだった。

「……あのー、博士？」

恐る恐る、ソラトはトウヤ博士に近づいてみる。

だが、やはり変化はない。

……まさか？

「トウヤ博士！」

机までたどり着くと、ソラトはこれでもかという大声で名前を叫ぶ。

すると、トウヤ博士は息を吹き返したみたいに肩を跳ねさせた。

「な、なんじゃー！」

「なんじゃ、ではないですよ！ 目を開けたまま器用に寝ないでください！」

「ああ、ソラト君。遊びに来たのかね？」

「違いますッ！ ポケモンをいただきにきたんですッ！」

「ああ、そうかそうか。忘れておったわい」

フォッフォッ、と愉快ゆかいそうに笑う博士に、ソラトはため息をつく。いかつい見た目に反して気さくなこの人が、エイレン地方におけるポケモン研究……特に『進化』の権威だとはいまだに信じられない。壁に掛かっている数々の賞状も、偽物ではないかと疑ってるくらいだった。

「お願いしますよお、ボクはポケモントレーナーになりたいんですから」

「フォッフォッ、そう焦るでない。ちゃあんと、約束のポケモンは

用意しておる」

そう言って、トウヤ博士は白衣のポケットから赤と白で塗装された拳大ほどのボールを取り出した。

モンスターボールだ。

それは野生のポケモンを捕まえたり、また移動するとき手軽にポケモンを収納して持ち運びすることができる特殊な道具だった。

無論、ポケモントレーナーの必需品だ。ひつじゅひん

自然と、ソラトの顔に笑みのはじける。

「そのポケモンですか？」

「ああ、そうじゃ」

トウヤ博士は机越しにモンスターボールを渡そうとする。

ソラトは身を乗りだして、それを受け取ろうとした。

しかし

「その前に、わしに見せるものがあるじゃろう？」

受け取ろうとした瞬間、ひょいっとモンスターボールを持った手を引っ込められた。

ぼかんとするソラト。

しかし、すぐにトウヤ博士が言わんとしていることを理解した。

「これですね？」

ソラトはリュックの中からある一枚のカードを取り出した。

そこにはソラトの顔写真が印刷され、表に『トレーナーズ・カード』とあった。

「うむ。確かにそれはトレーナーズ・カードじゃな」

トレーナーズ・カードとは、簡単に言えば十歳を超えた人間ならばポケモンを所持しても許されるライセンスのことだ。その他にもポケモンリーグの参加資格、またポケモン関連の道具の使用許可などといった権利がカード所持者には与えられている。

つまり、これがなくては公認のポケモントレーナーではないということだ。

トウヤ博士とは、トレーナーズ・カードを持つてくればポケモンを譲ってくれると約束していたのだった。

「しかしまあ、Cランク認定とはちょっと情けないのお。仮にもこの研究所に好き勝手に出入りしておるのじゃから、せめてBランクぐらい取って欲しかったもんじゃ」

「ボクはポケモンが好きなだけで、研究になんか興味ないですから」

「それにしても、基礎知識があればBランクぐらいとれるじゃろう？」

「……悪かったですね、基礎知識もなくて」

トレーナーズ・カードは国に申請しんせいをして発行されるのだが、その際にトレーナーとしての素養や資質がどうかをチェックする審査を受けなければならない。その結果の善し悪しでAからCのランクづけがなされ、つまりソラトは最もできの悪いCランク認定をされたというわけだ。

AでもCでも基本的な権利に大きな違いはないが、ただランクが低いほど何らかの制限がかかる。例えば、Aランクならば正当な理

由があればポケモンの所持数何百であろうと許されるが、Cランクは最高で三匹までしか捕獲してはならないとされている。これは、Cランクのトレーナーにはその数以上のポケモンは面倒をみきれないと判断されているからだ。

このほかにも、まだ様々な制限が低ランクには課せられているのが現実だ。

「まあ、おぬしのポケモンに対する姿勢は悪くない。審査の問題は、本当に基礎知識だったんじゃないだろうか」

ほれ、と今度こそモンスターボールをソラトに手渡してくれる。

「……うわあ」

まるで背中に羽が生えて浮いているような、奇妙な感覚が身体を包む。

胸の奥がトクントクンと高鳴り、ついトウヤ博士にこう言っていた。

「中のポケモン、確かめてもいいですか？」

博士は皺だらけの顔に、温かな笑みを浮かべてくれた。

「よしッ、でてこい！」

ソラトはモンスターボールの開閉ボタンを押す。

すると、ぱかっとうモンスターボールは勢いよく開き、中にいたポケモンがまばゆい銀光と共に机の上に姿を現した。

ふわりとした茶色い毛並みに、四足歩行の小型な体躯。

ぴんと尖った耳に反して、丸っこい輪郭の愛らしい顔つき。

濡れた黒いつぶらな瞳は、見てるだけで胸が締めつけられそうになっ
てしまふ。

イーブイ。

それがこのポケモンの名前だった。

「うわっ、かわいい!」

「フォッフォ、気に入ってもらえたかな」

「はいッ!」

目を輝かせ、ソラトはイーブイに顔を寄せようとする。

と、イーブイがおびえた表情でその場から後ずさった。

「……え」

「うむ、実はこのイーブイにはちと問題があつてのお。極度の臆病
なんじゃよ」

「お、臆病?」

「そうじゃ、それも人間だけでなく同じポケモンにすらおびえてし
まうぐらいに」

「……そんなポケモンいるんですかあ?」

「フォッフォッ」

「笑い事じゃないですよッ！」

「まあ、君のポケモンに対する愛は本物だから、旅をするうちに仲良くなれるじやろっ」

「……………だといいんですけど」

そんなやり取りをしている間も、イーブイは身体を縮ませて視線をさまよわせている。

……………この子、本当に大丈夫かなあ。

「それにしても、どうしてイーブイをなんですか？」

「わしの研究テーマが『進化』なのは知っておるじやろっ？ ポケモンのほとんどが比較的短時間で従来の形を捨て、新たな形態に進化する。人間ならば何十世紀もかかりそうな時間を、それこそ光の速さで駆け抜けるのじゃ。わしはその秘密を知りたくてのお、今までさまざまなポケモンの進化を研究してきたわけじゃが……………」

ゴホン、と博士は咳払いを一つ。

「このイーブイというポケモンは特に興味深い。このポケモンが持つ遺伝子はちよつと変わっておつてな、微弱な放射能を発する特殊な石に反応して進化したり、また土地の環境や磁場によって進化したり、はたまたトレーナーへの信頼度によって進化したりといった摩訶不思議な因子を持つ、まさに変わり種なのじゃよ」

「……………はあ」

何かすごいことを話しているのだろうが、ソラトは半分も理解で

きない。

「わしは友人のマサキ君から研究の一環いっかんとしてイーブイを譲ってもらったことがあってな、このイーブイはその個体の子どもの中の一匹なんじゃが……」

「言いたいことはよくわかりませんが、その言い方だとこのイーブイの他にもまだ別のイーブイがいるように聞こえるんですけど」

強引に遮おさへって少し非難がましい視線をくれてやると、博士は肩をすくめてみせた。

「正確には、おった、じゃな。最近用意したイーブイは全部で三匹おったんじゃが君がここに来る前にその二匹はもらわれていってしまつてのお。一匹は三日前に十歳になつた子に、もう一匹は君と同じく今日十歳になつた子に」

それはつまり、ソラトの他にもトレーナー志望の子がいたということだ。

それもソラト同様に、トウヤ博士にポケモンをくれるようお願いしていた。

別に不思議なことではない。

今までにも、トウヤ博士からポケモンをもらつて旅立つたトレーナーがいるという話は聞いたことがあった。というよりも、だからこそソラトはトウヤ博士にポケモンを譲ってくれるようお願いしたわけだが。

今日十歳になつた子、という言葉にソラトの心は妙なざわめきを覚えていた。

「……もしかして、今日十歳になつた子ってアカリですか？」

「うむ、その通りじゃ。いやあ、彼女にはまったく驚かされたものじゃ。ようやく夜が明けるといったぐらいに時間からここに訪れてポケモンをくれと言っのじゃからな」

あの彼女だったら、それぐらいのことはやってみせるだろう。

アカリはこの町の子どもの中でも飛び抜けた秀才で、特にポケモンに対する知識は半端ではなかった。現在確認されているポケモンの種類を全て網羅し、はたまた覚える技まで余さずに記憶しているという強者だ。ポケモンに対する情熱は言うまでもなく本物で、その現れがポケモンを受け取りに来た時間といつてもいいだろう。

……何だか、すでにポケモントレーナーとして負けた気がした。

同じ誕生日に生まれたのだから、自然と周りは自分と彼女を比較する。

頭の良いアカリと、要領の悪いソラト。

何でもスポーツができるアカリと、運動神経のないソラト。

友達をすぐに作れるアカリと、友達がなかなかできないソラト。

他にも色々比べられる。

その中で、ポケモンに対する姿勢だけは負けてないと思っていた。だから、いつもよりもずっとずっと早起きしてここに来たというのに。

また負けてしまった。

ふと、トウヤ博士が優しげな眼差しをこちらにくれているのに気がついた。

どうやら、こちらの心情を読み取ったらしい。

「確かにポケモントレーナーとして君は出遅れたかもしれないが、ポケモントレーナーの善し悪しはそんなことでは決まりはせん。どれだけポケモンと深い絆を結び、たくましく成長できるかが大事なのじゃ」

「……はい、トウヤ博士」

うつすらとにじんでいた涙を拭い、ソラトはにっこりと笑う。
そして、相変わらず^{きまどろい}挙動不審なイーブイと視線を同じ高さに合わせる。

どんなポケモンであろうと、これからの旅の相棒には違いない。

「よろしくね、イーブイ」

「……」

イーブイは何も応えず、ただ気弱な表情を浮かべてこちらを見て
いるだけだ。

でも、最初はこれでもいいと思う。

これから、ちょっとずつ仲よくなっていけばいいんだから。

「もどね、イーブイ」

ソラトはモンスターボールの開閉ボタンを押すと、ボタンの先から赤外線が発射され、それがイーブイの身体に当たる。すると、赤い光に包まれ、イーブイはモンスターボールの中に消えていった。
まったく不思議な道具だ。

「うむ、君ならそのイーブイをまだ見ぬ進化に導けるかもしれんのお」

「まだ見ぬ進化？」

「そうじゃ、イーブイは現在のところ七種類の進化が確認されてお

る。これはポケモンの中でも最多じゃ。わしは、イーブイはまだまだ進化の可能性を秘めていると考えておつてな、だからこの町の新人トレーナーの多くにイーブイを授けておるのじゃ。まだ見ぬ形態をこの目で確かめるために」

その言葉で、ぴんときた。

つまり

「イーブイがまだ確認されてない姿に進化したら、その詳細を教えろつてことですか？」

「フオツフオツ、察しがいいのお。まあ、そういうことじゃな」

最初の遺伝子^{ついでん}云々の話は、ここにつながっていたということか。十歳の少年に説明するのだから最後の部分だけかいつまんだからそれでこと足りたんじゃないか、とソラトは思わないでもなかった。

「……ポケモンをいただいたんですからそれくらいはしますけど」
言いながら、リュックからモンスターボール用のホルダーを取り出す。

それをベルトに装着した。

「何じゃ、ホルダーはつけてこなかったのか？」

「だって、モンスターボールのないホルダーって、何だか格好悪いじゃないですか」

えへへ、と照れながらホルダーにモンスターボールを収めようとするソラト。

しかし、サイズが合わないせいで、うまく収まってくれない。

「あ、あれ？」

「……まったく、何をしておるのか。ボールの開閉ボタンを素早く二回押してみるのじゃ」

「こうですか？」

カチツカチツ、と押してみると、モンスターボールは半分以下の大きさに縮んだ。

「おおッ！」

「その操作でモンスターボールはさらに持ち運びが便利になる。覚えておくのじゃよ」

「はい！」

今度こそ、ホルダーにモンスターボールは収まる。

サイズもぴったりだ。

トウヤ博士が椅子から立ち上がった。

「さて、これはわしからの饒別せんべつじゃ」

「これって……！」

差しだしてきたのは、赤色をしたポケットサイズの長方形の物体だ。

その中には現存するポケモン全てのデータが入っており、その他にも色々便利な機能が備わっているポケモン専用の電子図鑑だ。これは、ポケモントレーナーにとって憧れの品といって差し支えない。

「ほ、本当にもらってもいいんですか？」

「ああ、君には立派なトレーナーになってもらいたいからのお」

「ありがとうございますッ！」

ソラトは腫れ物にでも触るように、丁寧にそれをリュックにしまった。

もう準備万端だ。

ゴホン、とトウヤ博士が咳払いをする。

背筋を伸ばしたその姿は、なぜか玄関先で見送る母の姿を思い出させた。

「さあ、これから君の冒険が始まる。その道のりは長く険しいかもしれないぬ。途中でくじけそうになるかもしれないぬ。だがそんなときはポケモンと一緒に頑張って乗り切るのじゃぞ」

「はい、わかりましたッ！」

ソラトは深々と頭を下げ、振り切るように回れ右をする。所長室をでると、研究所の外に向かって勢いよく駆けだす。すれ違う研究員たちが、一様に頑張れと応援してくれる。今の自分だったら、何でもできそうな気がした。

それこそ、ポケモンマスターになることだって。

「いってきまーす！」

研究員たちに応え、ソラトは研究所の外に飛びだす。

今、冒険が始まった。

第一話・初めてのポケモン・（後書き）

本作を読んでいただきありがとうございます。

ソラトの相棒の登場です。

プロットを練ってるとき何にしようか迷ったんですが、結局あの子にしました。

ようやく町の外に出ます。

果たして、野生のポケモンと遭遇したらどうなるのかな。

ではまた次回に会いましょう。

イーブイの進化が8種類あると書いていましたが、本当は7種類ですよ．．．修正しておきました。

第二話・野生のきびしさ・（前書き）

野生ポケモンとの遭遇です。

うまくソラトとイーブイは切り抜けられるかな。

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第二話・野生のきびしさ

ミシマタウンはエイレン地方でも西の辺境地へんきょうちに位置している。

周囲の土地は見渡すかぎりのどかな自然が広がり、ミシマタウンからさらに西には鬱蒼うつそうとした森がどこまでも続いている。

そんな森に沿って北へと伸びる草原の道を、ソラトはのらりくりと歩いていった。

すでに故郷を離れて数時間が経過し、そろそろ代わり映えしない風景に飽きがきている頃だが、それほど疲れはなかった。

絶好の旅立ち日和に、念願のポケモントレーナーになったという高揚こうようのせいだろう。

今日は、いけるところまで進むつもりだった。

ソラトの現在の目的地は、この道をずっと北に行ったところにあるナゴシタウンという古い町だ。

ポケモントレーナーなら誰もが目指すポケモンマスター。

その第一歩が、その町にはあった。

ポケモンマスターになる道のりの絶対的な通過点として、まずポケモンリーグの参加が挙げられる。

ポケモンリーグとは、ポケモントレーナーたちにとっての夢の祭典のことだ。

それは地方によって名称が異なり、エイレン地方ではその名の通りエイレンリーグと呼ばれている。エイレンリーグは年に一度開催されており、全国の腕利きのトレーナーがポケモン同士を戦わせてしのぎを削り合い、トーナメントでその頂点を目指す。見事優勝を果たすとエイレン地方の最強トレーナー、つまりはチャンピオンへの挑戦権を獲得することができ、まさにそれはポケモンマスターへの道程といっても過言ではない。

そんなエイレンリーグへ参加するには、まず全国各地にある八つの『ポケモンジム』という施設の門を叩かなければならない。ポケ

モンジムを管理するジムリーダーにポケモンバトルで勝利すると、その証として『ジムバッジ』を手に入れることができ、それを八つ集めることによってエイレンリーグへの参加切符を手に入れることができるのだ。

それはとてつもなく長く、途方もなく険しい道だ。

星の数ほどいるポケモントレーナーのほんの一握り、いや一つまみだけが歩むことが許されるいばらの道なのだ。

今、ソラトはその第一歩を踏みだそうとナゴシタウンを目指している。

ここから最も近い町のナゴシタウンには、ポケモンジムがある。

そう、エイレンリーグ参加の最初の関門だ。

風の便りによれば、一つのポケモンジムも突破できずに挫折してしまつトレーナーも相当数に昇ると聞く。

つまり、それだけジムは難関だということだ。

だが、それでもまずは挑戦してみる。

もしかしたら、当たって砕けてしまつかもしれない。

しかし、そうはならないかもしれない。

ソラトには、まだ二つの可能性が残されている。

どちらになるかなど、実際やってみなければわからないのだ。

と、森の方から大きな葉ずれが響いてきた。

あまりに不意打ちだったので、思わずソラトは身をすくませてしまつ。

「ポッポー」

次の瞬間、鳴き声と共に森の方から複数の影が宙へと飛びだした。茶色と白色を基調とした、小さな鳥型ポケモンだ。

そいつらはソラトの上空をまたいで、東に広がるミシマ草原の方へ飛んでいった。

「あれって……」

ソラトがそいつらの後を目で追っていると、草原に降り立つのが見えた。

自然と身体がそちらの方に動きだす。

なるべく音を立てないように移動してまもなく、そいつらの姿をはつきりと肉眼で確認できた。どうやら食事中のようで、草をかき分けて小虫を探しているらしい。

まだ少し距離があったが、ソラトはリュックから折りたたまれたポケモン図鑑を開く。

そして、それをそいつらの方向に向けた。

ポケモン図鑑の機能の一つ、ポケモン判別システム。

図鑑に搭載された小型カメラがポケモンを認識すると、そのポケモンについての情報を自動で引きだしてくれるのだ。

図鑑の中央の液晶画面に、そいつらの姿が表示される。

次いで、女性を模した電子音が簡単な音声説明を開始した。

『ポツポ。小鳥ポケモン。森林などに多く生息し、また都会でもその姿を確認できる。性格は極めて温厚で、あまり戦いを好まない』

「やっぱりポツポだ」

ミシマタウンでもよく見かけたポケモンだ。

ポケモン図鑑の説明通り、穏やかな気性だと母も言っていた。

「……あッ、そうだ」

図鑑をリュックにしまったとき、ソラトは一ついいことを思っていた。

ポケモントレーナーといえば、やはりポケモン同士を戦わせるポケモンバトルだ。

しかし、唯一の手持ちのポケモンは極度の臆病おくびょうな性格でとてもバトルには向いてそうにない。

そこで、だ。

まずは穏やかな気性のポツポで、ポケモンバトルに慣らしてみるのはどうだろうか。

練習の相手としては、最適のように思える。

よし、ものは試しだ。

ソラトは腰のホルダーからモンスターボールを取りだし、開閉ボタンを二度押して元のサイズに戻す。それから、今度は一度だけ開閉ボタンを押した。

「行けッ、イーブイ！」

銀光と共に、イーブイがその姿を現す。

研究所同様に、身を縮まして辺りをきよきよと見回し始めた。

「イーブイ、初めてのポケモンバトルだよ」

声をかけても、足下の臆病な相棒はまるで聞こえていない様子だ。

……何だか、嫌な予感がした。

「ちょっと聞いている？ おーい」

無視。

というか、聞く余裕がないように見える。

人間で言うところの、パニック症状に似ていた。

「落ち着いてよ、イーブイ」

ソラトはその場で腰を落とし、イーブイの背を撫でようとした。

その瞬間、尻尾で思いつきり手をはじかれた。悲鳴を上げるよりも前に、イーブイがさつと後ずさる。はじかれた手よりも、心の方が痛かった。

「……イーブイ」

トレーナーとしてこういふときはどうしたらいいのか。

誰かにアドバイスを請おうにも、今は自分一人しかない。

故郷を離れて旅にでるといふことは、つまりこういふことなのだ。全てが全て、自分一人でこなさなければならぬ。

そして、何をしても自分の責任となる。

自分が考えていた以上に一人で旅にでることの大変さを痛感し、つい涙がこみ上げてきそうになった。

けれど、ほとんど意地でそれを押しとどめる。

こんなことで一々泣いていては、ポケモンマスターになどなれるはずがない。

もっと、しっかりしなくちゃいけない。

「イーブイ、ボクを見て。大丈夫だから」

ソラトはできるだけ優しい笑顔を浮かべてイーブイに言葉をかけてやる。

敵じゃないということを教えてやる。

しかし、イーブイは変わらずまたも後ずさる。

ソラトはため息をこぼしそうになるが、寸前のところで我慢する。トウヤ博士の研究所で自分に言い聞かせた言葉を思い出す。

最初はこれでもいい。

ちよつとずつ仲よくなっていけばいいのだ。

「……って、ちよつとイーブイそれは下がりすぎだよ！」

とにかくこちらから逃げることにしか頭がないのか、すぐうしろにポツポの集団がいるのにまるで気がついていないようだ。

どん、と手前にいたポツポにイーブイが尻尾からぶつかった。

「ポツポーツ！」

いきなりの接触到、ポツポは大声を上げる。

それから、羽を何度も激しくばたつかせた。

どうやら威嚇いかくしているらしい。

そりゃ、突然ぶつかってきたら驚いて怒りたくもなるだろう。

そのポツポの威嚇に、他のポツポまで反応を示す。

とてもではないが友好的なそれではない。

無礼者、と批難している目だ。

極めて温厚というのは、こちらから何もしかけなければという意味だったようだ。

イーブイはすっかり怯え、今度はポツポから後ずさりする。

奇しくも、こちらに戻ってくる格好だ。

「ポツポーツ！」

ぶつかられたポツポが勢いよく空へ舞い上がり、イーブイへ向かって飛翔する。

そして、そのままの勢いで激突していった。

たいあたりだ。

くぐもった悲鳴を上げ、イーブイはソラトの足下まで吹っ飛んでくる。

「イーブイ！」

今の一撃でイーブイは完全に目を回していた。

モンスターボールに戻そうとしたら、残りのポツポたちも同じようにたいあたりをしかけてくる。

間に合わない。

ソラトは咄嗟とっさにモンスターボールに戻すのをあきらめ、イーブイを包み込むように胸の前に抱きかかえてポツポの攻撃からかばう。

連続して身体に重い衝撃が走り、踏ん張りきれずによるける。

小型のポケモンとはいえ、その攻撃力はなかなかのものだった。特にまだ十歳の少年には堪こたえる。

「くッ」

ソラトはイーブイを胸に抱えたまま走りだす。

とにかくこの場から避難しなければならぬ。

と、頭に衝撃が突き抜ける。

たいあたりを、側頭部にまともにくらった。

視界に星が飛び散り意識がかき消えそうになったが、何とか耐える。

ここで意識を失っては、イーブイがひどい目にあってしまう。

ソラトは何も考えずに駆ける。

ポツポの襲撃はおさまらない。

いつの間にか、ぷつぷつと意識が途絶えていた。

第二話・野生のきびしさ・（後書き）

本作を読んでいただきありがとうございます。
誰でも初めてはうまくいかないものですよね。
ソラトとイーブイもこれから頑張ればいいのです。
ではまた次回に会いましょう。

第三話・ポケモンセンターの夜・(前書き)

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第三話・ポケモンセンターの夜

何か音が聞こえる。

ザーザー、という連続した音。

昔からよく知っているけど、思い出せない。

えーと、何だっけ？

「……雨だ」

急激に意識が覚醒し、重いまぶたが持ち上がる。

始めはぼやけていた視界も、次第に明瞭めいりょうとなる。

ベットの上だった。

それも、二段ベットの一段目だ。

「……ここは？」

ソラトは身体を動かそうとして、しかし激痛で口から苦鳴がもれた。

よく見てみると、あちこち包帯がまかれている。

口の中も切れているようだ。

そういえば、自分はあるからどうしたのだろう。

ポップの集団から逃げていた記憶はある。

何度も何度もたいあたりを叩きつけられ、しまいにはかぜおこしまでくらくらって無様にこけまくったのだ。

それから……それから、どうしたんだろう？

考えてても埒が明かなそうだったので、痛みを我慢して起きあがってみる。

広がった視界に映ったのは、こじんまりとした部屋だ。

部屋の両端に二段ベットが二台置かれ、他には何も無い。

窓の外に目を向けて見ると、快晴だったあの空が見る影もない。暗雲がたれ込め、見事な土砂降りだった。

ザーザー、というのはその雨音だ。

意識を失ってどのくらい時間がたったのかわからないが、外は闇夜に染まっている。

「ラッキー」

と、不意に部屋の扉が開かれ、ピンク色をしたポケモンが入ってきた。

大きさは、百四十センチの自分より一回り小さいくらいか。

卵みたいな胴体をしており、申し訳程度といった感じに手足や尻尾が生えている。

腹部には袋があり、そこに卵が収まっていた。

たしか、ラッキーというポケモンだ。

そのラッキーは頭の上にナースキャップを乗せていて、それはつまり

「もしかしてここって？」

頭に浮かんだ考えは、次の瞬間確信に変わった。

ラッキーに続いて、若い女性が入室してきた。

ピンクのワンピースに白のエプロン姿。

ラッキーと同じように頭の上にナースキャップを乗せている。

「ジョーイさん」

それが、彼女の名だった。

「はい、ジョーイです」

柔らかい笑顔でそう応え、彼女はベットの脇までやってくる。

「あー、ここってポケモンセンターですよね？」

「ええ、そうよ。ミシマ草原の北端にあるポケモンセンターね」

「やっぱり」

ポケモンセンターとは、ポケモントレーナー御用達の救護施設のことだ。

傷ついたポケモンを無料で治療してくれたり、また無償で宿泊設備を提供してくれたり、まさに旅をするポケモントレーナーにとってはなくてはならない存在だといえる。

ポケモンセンターは全国各地に設置されているので、誰でも気軽に利用することができる。

ただし、トレーナーズ・カードがなければ治療や宿泊は有料だったりするが。

ちなみに、ジョーイはポケモンの治療が専門の医者で、ラッキーはその助手だ。

もっとも、ソラトに治療を施してくれたことから、ある程度なら人間の治療も可能なかもしれない。

「あなたは草原でボロボロになって倒れていたところを、通りがかったトレーナーにここまで運ばれたのよ」

どうやら、ポップを振り切った後に力尽きて倒れたらしい。

ほとんど記憶にない。

「そうだったんで……」

すか、と言おうとして、はっと思い出した。

「そっだ、イーブイ！ ボクのイーブイはッ！」

「無事よ。あなたより全然軽傷ね。今、別の部屋でぐっすり眠ってるわ。この子に『うたう』をしてもらってね」

この子とは、ラッキーのことだ。

ポケモンには、歌に睡眠作用がある種もいるらしい。ラッキーもその類なのだろう。

ただ、だからこそ心に引っかけがあった。

「別の部屋？ それに眠ってるって……」

「実はね、あなたと一緒に運び込まれたイーブイんだけど、意識を取り戻すなり暴れだしたのよ。何かにおびえるみたいだね。とても手がつけられなかったから、この子にうたってもらって、落ち着くまで様子見してるの」

おそらく、ポップに襲われた記憶が瞬間的にフラッシュバックして、怯えて暴れだしたのだろう。

ソラトだって、しばらくはポップの姿を見たいとも思わなかった。

「あのイーブイ、あなたのポケモンよね？ いったい何があったの？」

隠しても仕方がないので、事情を説明する。

ジョーイは、しょうがないなあといった顔を浮かべた。

「それはあなたが悪いわ」

「ボクが……悪い？」

言われていることの意味を把握し損ねたように、ソラトはきょとんとしてしまった。

「そう、まずトレーナーはポケモンと信頼関係を築くことが何より大切なよ。バトルに向いてない性格だからって無理やりバトルを経験させてそれを克服しようだなんて、あなたがまだまだポケモンのことを軽く見ている証拠だわ。ポケモンはわね、バトルの道具じゃないのよ」

「……」

ボクはイーブイをバトルの道具だなんて思っていない、と言おうとしてできなかった。

本当にそうだろうか？

トレーナーならポケモンバトル……そう思って、イーブイをポツポと戦わせようとしたのではなかったか。

表面上は、まずはイーブイと仲良くならないといけないとわかっていた。

でもそれは深層意識で、バトルをしたいからという思いがあったからではないか。

だとしたら、ジョーイさんの言う通りだ。

ソラトは唇をかむ。

「あなたが本当にポケモンのことを思っているなら、まずはイーブイに信頼してもらおうことから始めなくちゃいけないわ。互いに信頼

し合うことによって、初めてポケモンバトルは成り立つのよ」

「……はい」

まなじりに涙がにじみ、うなだれずにはいられない。

ジョーイがそっとソラトの肩に手をおいた。

「まあでも、あなたがあなたなりにポケモンを大事にしているのことはわかるわ。だってあんなにポロポロになってまでイーブイを守ったんですもの。これからその気持ちを大切に、まずはポケモンと心を通わすことを第一に考えてね」

「わかりました」

涙を腕で拭い、ソラトは面を上げる。

と、そこで部屋の扉が開いた。

別の個体のラッキーが部屋の前に立っている。

しかし、入ってくる様子はない。

代わりに、別のポケモンが拳動不審気味に入ってきた。

ちっちゃい身体で、茶色いふわふわとした毛並み。

濡れたようなつぶらな瞳は、やはり胸が締めつけられそうになっ
てしまう。

「あら、目が覚めたのね。その様子だと、だいぶ落ち着いたようね」

「イーブイッ！」

ソラトは身体の痛みなど無視し、ベットから抜け出す。

駆けよろうとしたら、イーブイが飛び跳ねるようにびくついた。

反射的に足を止め、なるべく目の高さを同じに合わせようとする

場にひざをつく。

昔、母がよく言っていたことだ。

ポケモンと心を通わせようと思ったら、まずは同じ目の高さに合わせてることを。

そうやって、ポケモンと同じ景色を見ること。

ポケモンが何を考えているのか感じ取ること。

自分がポケモンになったつもりになること。

母の言葉の意味が、今始めてわかった気がした。

「イーブイ、ごめんね。痛い目にあわせたりなんかして」

イーブイは何も応えない。

目すら合わせてくれない。

見かねたのか、ジョーイが助け船をだすようにこう言った。

「ねえイーブイ、あなたがそれだけの軽傷で済んだのは、この子があなたをずっとポツポから守り続けていたからなのよ」

「……………」

それを聞いたイーブイはしばらく逡巡しゅんじゆんした後、何も言わずおずおずとこちらに視線を合わせた。じっと、何かを探るように見つめてくる。

いったいどれくらいの時間がたったのだらう。

そのまま沈黙が続く、永遠にこのままなんじゃないかと思いはじめた頃

「……………ブイ」

不意にイーブイが小さな鳴き声を上げた。

それにどんな意味が込められているのかはわからない。
ただ、初めて自分に向けてイーブイが声をだしてくれた。
それがなぜかうれしくて、ソラトの顔に自然と笑みがこぼれる。
不思議と、これからうまくやっていけるんじゃないかと思った。
外の雨は、いつしかやんでいた。

第三話・ポケモンセンターの夜・（後書き）

本作を読んでいただきありがとうございます。

ソラトとイーブイの関係も、少しは進展しましたね。

お互い、早く友達になれるといいですね。

次回はソラトとイーブイがまたも大変な目にあうお話です。
では、また次回に会いましょう。

第四話・川に流されて・（前書き）

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第四話・川に流されて・

ミシマ草原を超えてさらに北へ進むと、小高い丘が連なる険しい地帯にでる。

岩場が多く、自然と高低差のある道になるため草原と違って歩くのも一苦労だ。

しかも、先日の雨で足下が最悪な状態で、思わぬところで転んでしまいそうになる。

新品だったスニーカーも、あつという間に汚れまみれになってしまった。

唯一の救いは、今朝から快晴だということぐらいだろう。

「……………うーん」

ポケモンセンターを出発してしばらく、広げた地図とソラトはにらめっこをしていた。

おそらく、こっちで行き先はあっているはずなのだが……………あまり自信はない。

ミシマ草原ならこれまで何度もかけたことがあったのでそう心配することもなかったが、さらにそこから北上した経験はほとんどないためどうしても落ち着いていられなくなってしまふ。今まで誰ともすれ違っていないのもそれを助長していた。

「ねえ、君はこの道で合ってると思う？」

その言葉を向けるのは、ソラトの後ろにいる小さな相棒だ。

ちよこちよここと可愛い歩き方で、少し距離を取ってついてくる。

イーブイは少し目を合わせただけで、何も応えてくれなかった。

「……あんまりボクにまかせっきりだと、そのうちエライ目にあっ
ちやうかもよ」

今度は目さえも合わせてくれない。

……やばい、泣いちゃいそうだ。

ソラトは引き続き地図とにらめっこをしたまま北上していく。

イーブイも後ろからちよこちよこついてくる。

イーブイをモンスターボールからだしているのは、ジョーイさん
の案だった。

信頼関係を築くなら、できるだけ長い時間を一緒に過ごすこ
とよ。

気持ちは一方通行じゃなくて、分かち合わなければいけない
わ。

共感することって、仲間としてとても大切なことなのよ。

そういうわけで、今イーブイはモンスターボールに入っていない。
一緒にナゴシタウンを目指して、歩きながら北へ向かっている。

信頼関係を築いて、仲よくなるために。

ただ、その道程は山あり谷ありとかなり大変そうだった。

イーブイのさっきの態度もさることながら、少し距離を取ってつ
いてこられるのは精神的にかなり痛い。

否応なしに、今の自分たちの関係を突きつけられているような感
じがしてしまうのだ。

もつとも、昨日までと比べればだいぶ関係は進展している。

昨日まではとにかく怯えられていたが、今はそんな様子はほとん
どない。

まず、昨日のように逃げだそうとはしなくなつた。それは、やはり確実に大きな進展と言えるだろう。この調子で頑張っていけば、きっと仲よくなれる道が切り開けるはずだ。少なくとも、ソラトはそうだと信じている。

「……あッ！」

ふと、岩場ばかりで視界の悪かった前方が開けた。少し行ったところに、大きな川が見える。

幅が広く、昨日の雨のせいか水かさが増して流れも早い。

その川を境に向こう側にはどこまでも雄大な平原が広がり、ずっと先に青い山々が屹立きつりつしているのが確認できた。

そのさらに向こう側にあるのが、ナゴシタウンだ。

おそらく、このペースで歩き続ければ遅くとも一週間ほどで到着できるだろう。

そしたら、待っているのは初めてのポケモンジム。

ポケモントレーナーとして真価が問われる戦いがそこにある。

それを考えると、不思議とやる気が腹の底からわいてくる。

「イーブイ、協力してジムバッジを手に入れようね」

そんなソラトの思いとは裏腹に、相棒はどうしてもよさそうにそばを向いている。

……正直なところ、やる気が空回りにならないかもものすごく心配だ。

内心で憂いに浸っていると、不意にソラトの耳にこんな可愛らしい音が聞こえてきた。

くきゅるるるるっ。

その発生源に目をやると、相棒がそっぽを向いたまま、しかし視線だけをこちらにちらちらとよこしてどこか物欲しそうな顔をしていた。

実にわかりやすい。

「そろそろお昼ごはんにしようか」

クスリと笑いながらそう言って、ソラトは辺りを見渡す。

ちよつと行ったところにある川のほとりに、休むのに最適そうな生木を見つけた。

あのたもとなら、あまり濡れてなさそうだ。

「あそこまで頑張ろっか」

ソラトとイーブイはそこまで歩いていく。

到着すると、予想通りあまり濡れていなかった。

一応、座り込んで大丈夫そうだ。

「さてっつと」

ソラトはリュックを肩から外し、幹みきに背中を預けるように腰を下ろす。

イーブイは少し離れたところに座り込んでいた。

遠いなあ、と思いつながら、リュックからプラスチックの容器とポケモンフードを取りだす。容器の中にポケモンフードを入れてやり、イーブイのところを持って行ってやった。

持って行った瞬間に距離を取られても、もうそれは割り切るしかない。

地面に容器をおいて、また木のたもとに戻る。

それを確認して、ようやくイーブイは容器に近づいてポケモンフードを頬張り始めた。

それはおびえるほどではないが、警戒には値するということなのか。

もしこの警戒を解くことができれば、果たしてそこはゴールなのかそれともまた新たな試練が顔をだすのかどちらなのだろう。

今あれこれ思案したところで詮せんのないことだが、やはり考えずにはられない。

自分の相棒のことなのだ。

母とジョーイの言葉が頭に浮かぶ。

とにかく、今は精一杯やるしかない。

「いただきまーす」

ソラトはリュックからパンを取りだし、かぶりつく。

日持ちするパンらしいが、固くて味もおいしいと言いつつ。

口の中の水分も、一気に持っていかれた。

まだ一日しか経っていないが、母の料理が懐かしかった。

じわり、と涙がわき上がってきそうになる。

家をでてから、これで何日目だろう。

情けない、とソラトは思う。

旅立つ前と、何も変わっていない。

友達ができず、それどころかいじめられてよく泣いていたあの頃と。

泣いたらいつもトサキントに慰めてもらっていたあの頃と。

旅にできれば、少しは自分が変わるんじゃないかと思っていた。

友達もたくさんできるんじゃないかと思っていた。

でも、それは逃避でしかなかった。

今、気がついた。

自分は、ポケモンマスターになりたいという気持ちを使い込みに使

っていただけなのかもしれない。

そうだ、自分はポケモンマスターになんかなりたいのではない。ただ、自分を変えたかっただけなのだ。

ソラトはひざを抱える。

自分は、なんて愚かだったのだろう。

最低すぎる。

マヌケもいいところだ。

と、そこでふとソラトの胸中に一つの疑問が浮かんだ。

では、イーブイと仲よくなりたいたいというこの気持ちも偽りなのだろうか。

自分は、本当にイーブイと仲よくなりたいたいと思っているのか？

自分は、本当のところイーブイをどう思っているのか？

自分は

「ちょっと、イーブイ！」

視界の端にちらりと何かが映り、ソラトははっと我に返る。いつの間にか、イーブイは川に顔を突っ込もうとしていた。どうやら、ノドがかわいたらしい。

ソラトの持っているポケモンフードは、安物のせいか感覚としてはぱさぱさのクッキーみたいな感じなのだ。

口の中が乾くのも無理はない。

しかし、それにしても危ない。

もし川に落ちたりしたら、大変なことになる。

「ボクが水を汲んであげるから」

そう言って立ち上がった、まさにその瞬間だった。

「ブイッ!!」

ざっぶん、と水しぶきを上げてイーブイが川に落ちてしまった。
そのまま流されていく。

「イーブイ!!」

ソラトは一目散に駆け出した。

昨日の雨で増水した川は、容赦なくイーブイを襲う。

泳ぎが不得手というのもあるのだろう。

イーブイはなす術なく苦しそうにもがいていた。

このままでは、遅かれ早かれ溺れてしまう。

命の危機だ!

「ブイイッ!!」

「くそおッ!!」

ソラトは上着を脱ぎ、躊躇せず川に飛び込む。

わかっていたことだが、流れが早い。

トサキントとよく湖で遊んでいたので泳ぎ自体は得意だが、この状態では溺れないようにするだけで精一杯だった。

しかし、それでもソラトは先に流されているイーブイ目がけて足を漕ぐ。

持てる力を全て使って、相棒を助けようと泳いでいく。

イーブイの姿はとらえている。

小さな身体は、今にも沈んでしまいそうだった。

お願い、間に合って!

「こつちだよ、イーブイ！」

ソラトは泳ぎながら手を伸ばす。

イーブイの身体をつかんだ。

その瞬間、びくつとイーブイが震える。

怯えた表情と、何か別の感情がその顔には混ざっているように見える。

何だろうと思ったが、そんなことを今この状況で考えている余裕はない。

両腕を使って、イーブイを胸の前で強く抱きしめる。

絶対に離さない。

何が何でも助けるんだ。

ソラトは岸辺の位置を確認する。

かなり遠い。

ずいぶんと川の中ほどまで流されてしまっている。

しかし、それがどうした。

助けるには、岸辺まで泳ぐしかないのだ。

自分を奮い立たせ、ソラトは岸辺まで泳ごうとする。

しかし、思うように進めない。

押し寄せる奔流ほんりゅうに、水を大量に飲んでしまう。

次第に、視界がかすんできた。

腕の中のイーブイも、かなり衰弱しているようだ。

このままでは、自分とイーブイ両方の命が危ない。

頭を巡らせる。

何か助かるいい方法はないか。

何でもいい、せめてイーブイだけでも……。

だが、川のご真ん中で希望を抱けるものは何一つとしてなかった。

万事休す。

身体力が徐々に抜けてくる。

ここまでなのか。

と、そのときだった。

「ハッハー！」

この窮地きつちにはあまりに不似合いな陽気な声が聞こえた。

その声は、頭上から降ってきた。

水流に抗うように、ソラトは上空を仰ぐ。

燦然さんぜんと輝く太陽を背に受け、何かが空を飛んでいた。

それは墜落するように高度を下げて、こちらに向かってくる。

「少年、こっちに手を伸ばしな！」

いよいよ混濁してきた意識の中、しかし力をふりしぼり天に向かって手をかかげる。

何があだかわからないが、ただ本能は手を伸ばせと叫んでいた。
イーブイを助けたいならばそうしろ、と。

何かが力強く手をつかんだ。

「よおし、捕獲完了だ！ いいぞ、引き上げてくれ！」

「ムックホーク！」

次の瞬間、ソラトの身体は上に引つ張り上げられる。

それもすごい勢いで、だ。

ぐんぐん高度は上がり、強風が肌の上をすべっていく。

それもすぐにおさまり、そして

「よお、少年。もう大丈夫だ」

どこまでも晴れやかなその声に、ソラトはようやく自分の状況を

理解した。

今、自分は空を飛んでいた。

見知らぬ青年が大型の鳥ポケモンの背に乗り、伸ばしたソラトの手をつかんでいる状態だった。

あの絶体絶命のピンチから助けてくれたのだ。

救世主だ、とソラトは思った。

彫りの深い整った顔に剛気な笑みを浮かべて、青年はこちらを見ている。

「……イーブイを、お願いします」

「おう、まかせろ」

胸の前に抱えたイーブイを、ソラトはそつと青年に手渡す。

これでイーブイが助かる、とほっと胸をなで下ろした。

安心したせいか、急速に意識が溶けるように薄れていく。

青年が何か叫んでいるようだったが、それもまもなく聞こえなくなつた。

第四話・川に流されて・（後書き）

本作を読んでいただきありがとうございます。

ソラトも苦難続きですね。

これからもつと苦難が続きます。

……ニヤリ。

では、また次回にお会いしましょう。

第五話・さすらいのポケモントレーナー登場・(前書き)

少し期間があいてしまいましたね。

執筆する時間をください、とか神様に願ってもまったく叶いそうにありません。

神様はいじわるです。

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第五話・さすらいのポケモントレーナー登場・

なぜか、自分とイーブイはまだ川に流されている。

何もできず、自然の猛威にさらされている。

ソラトはしっかりとイーブイを抱いていた。

腕の中で震える小さな身体を、何があっても離さない。

「大丈夫だからね」

大量の水が口の中に入って、それはがぼーぼーぼがぼらぼと聞こえた。

身体が鉛のように重くなってくる。

ふと、イーブイの身体がすつと軽くなり、痛いほど筋張った。

何だろう、と思い腕の中を見ると、そこには白骨化したイーブイがいた。

「うああああッ！」

その叫びと同時に、目が覚めた。

陸だった。

川に飛び込む前に休んでいた生木の側で、ソラトは横になっていた。

呼吸は浅く速く、全身汗でびっしょりだ。

いや、厳密には汗のせいばかりではない。

川の水だ。

溺れかけて、しかしそれを見知らぬ青年に救ってもらったのだった。

夢か、とソラトは思う。

さっきのイーブイが白骨化したのは、ただの夢だったのだ。

ほっと安堵のため息をついて

「すごい叫び声だったな。何か嫌な夢でも見たのか？」

いきなりかけられたそれに、ソラトは反射的に上体を起こした。驚きに、叫び声を上げそうになる。

しかし、それは寸前で堪えた。

二十代半ばほどの青年が、心配するようにこちらの顔を見ていた。

「ええ、まあ……ちょっと」

素直にそう応えた次の瞬間、はつくしゅん、とくしゃみが飛びだした。

鼻をすするソラト。

早春とはいえ、まだまだ冬の残滓ざんしが大気には漂っている。今にして思えば、よくこの気温の中で川に飛び込んだものだ。

「風邪ひいちまったか？」

「……いえ、大丈夫です」

言いながら、ソラトは状況の把握に努める。

青年とは、たき火をはさんで向かい合っていた。

イーブイはソラトの前で、身体を丸めてたき火に当たりながら眠っている。

気持ちよさそうにスヤスヤ、だ。

どうやら、青年がわざわざ身体を温められるようにたき火を用意してくれたらしい。

「あの……」

ソラトの問いを、青年は察するようにつづった。

「オレの名前はユウキ。さすらいのポケモントレーナーだ」

「ボクはソラトと言います」

さすらいって当てもなくふらふらするって意味だったかな、と考
えながら挨拶を返す。

さすらいかどうかはともかく、青年はいかにも旅装といった服装
をしていた。

色あせた深緑のローブに、何を踏みつけても大丈夫そうな皮のブ
ーツ。

今時珍しい大きな麻袋に、これはちょっと微妙なテンガロンハッ
トに似た帽子。

昔読んだ童話に登場する主人公そっくりだ、とソラトは思った。
唐突に寒気を感じ、ぶるりと震える。

濡れた服のままいたのが、いけなかったのかもしれない。

「服を脱がしておこうと思ったんだが、その子が君を守るように威
嚇して近づけなくてなあ。まったくトレーナー思いのいいポケモン
だな。まあ、川に流された疲れのせいかな、眠っちゃったようだけ
な」

「……え」

一瞬、何を言われているのか理解できなかった。

イーブイがボクを守るように威嚇いかくした？

あのイーブイが！

その驚きが顔に出てしまったのだろう。

ユウキが怪訝そうな顔を浮かべた。

「どうかしたのか？」

「……えつと、その」

言っているいいものかと悩んだが、この際だと思って事情を説明する。
ユウキはにかつと笑った。

「そりゃあ、簡単なことだ。君がそのイーブイに認められたんだよ」

「認められた？」

「そうさ。遠くの方から見てたけどよ、君はイーブイを助けるため何の躊躇いもなく川に飛び込んだだろ。ポケモンだって、それがどういふことなのかちゃんとわかる」

川に飛び込んだところから見てたのか、という思いは今はずっとおおく。

ユウキの主張はつまり、ソラトの思いがイーブイに伝わったということだ。

しかし、とてもそれを素直に喜べそうにない。

ソラトはひざを抱える。

「……ボク、イーブイに認められていいような人間じゃないんです。ポケモンマスターになるため町をでて、でもそれって言い訳で、本当は過去の自分を変えたかっただけで」

ぐず、と垂れたその鼻水は、寒さが原因であって欲しいと思った。頬に涙が伝う。

「イーブイと仲よくなりたいうって気持ちも本物かどうかかわからなくて、それどころか本当はイーブイのことをどう思っているのかもわからなくて……」

ユウキは気むずかしそうな顔をし、胸の前で腕を組んだ。

「うーん、出会ったばかりのオレが言うのも何だが、君は本当にポケモンを大切にしていると思うぞ。確かに君は、過去の自分を変えたくて故郷を離れたのかもしれない。でも、君のポケモンを思う気持ちまで偽りかと言ったら、そうじゃないだろう？ 君にだって、故郷で友達になったポケモンの一匹や二匹いるだろう」

トサキントの姿が頭に浮かぶ。

ソラトはこくりと頷いた。

「じゃあ、そのポケモンたちとイーブイに対する気持ちに何か差はあるのか？」

考えるまでもない。

「いえ……」

「だろう？ そうじゃないと自分の命も省みずあの激流の川に飛び込むなんて真似できないもんな。つまり、そういうことじゃないのか？ それとも、君はポケモンマスターを目指したら過去の自分が変えられる、だからそのためにイーブイを手なずける必要があるなんて考えていたのか？」

「……そんなこと……」

瞬間的に、腹の底から熱いものがせり上がった。今まで感じたこともない、それは本物の怒りだ。確かに、自分の気持ちを持ってあましているのは事実だ。しかし、それだけは違つたと断言できる。ソラトの魂が、そうだと叫んでいるのだ。

「そこで怒るってことは、もう答えはでたな」

青年は満足そうに頷いた。

「……でも、じゃあボクはこれからどうしたらいいんでしょう。ポケモンマスターになりたいって思いはウソだった。このまま旅を続けても……」

「何もポケモンマスターを目指すことが全てじゃない。トレーナーとポケモン、友達同士でぶらりと世界を旅してみるのも悪くないさ。旅の目的なんてもんは、あとで見つけたっていい。オレだってそのクチだしな。いいか、よく覚えておくんだぞ少年。人生はな、何も今が全てじゃない。過去、現在、未来が合わさって、初めて人生なんだ」

ユウキは剛気な笑顔を浮かべる。

それはどこまでも寛大で、ソラトは自然と頬が緩むのを感じる。

確かに、彼の言うとおりだ。

何も、今ここで全てを決めなくていい。

まだ旅は始まったばかりなのだ。

これから時間をかけて、ゆっくりと旅の指針ししんを定めたっていいだろう。

気がついたら、涙は止まっていた。

ふいに、相棒が小さな声を上げた。

「……ブイ」

「イーブイ！」

目覚めた相棒を、ソラトは恐る恐る抱きかかえる。

イーブイはまったくびくつかない。
抵抗もしない。

むしろ、接してくれることを望んでいるようにさえ思える。

イーブイはつぶらな瞳でこちらの顔をのぞき込んでいた。

「大丈夫だった？」

「ブイ」

「ボクを守ってくれてたんだってね。ありがとう」

でも途中で眠っちゃったけどね、とは言わないでおいた。

ソラトは小さな相棒の身体を胸の前でぎゅっと抱きしめる。

イーブイもそれに応えるように、胸に顔を寄せてくれた。

川で溺れているイーブイを手につかんだとき、そのとき浮かべていた表情の正体がわかった気がした。

それは、まだどこかに残っていた自分に対する怯え。

もう一つは、あの激流の中を助けに来てくれた安堵。

あくまでも、それらはソラトの想像でしかない。

でも、そうだったらいいな、と思った。

「ああ、でもイーブイ。この人は悪い人じゃないよ」

「ブイ？」

「ユウキさんって言って、さすらいのポケモントレーナーなんだって」

いまいちさすらいの意味をとらえ損ねている気がしないでもないが、この際もう何だっがいい。彼は自分にアドバイスをくれたいい人で、自分とイーブイを助けてくれた救世主。それだけ知っていれば充分だ。

「ムツクホーク！」

と、唐突に遠方から高らかな鳴き声が聞こえてきた。それは川から助けてもらうときにも耳にした気がする。

「おっ、帰ってきたな」

それからまもなくして、たき火にくべる用と思われる枝を何本か足につかんだ大型の鳥ポケモンが、ユウキの傍らかたわに舞い降りた。灰色と白色、あとは黒色の羽をしていて、先端が朱色のトサカを持つポケモンだ。

「このポケモンって……！」

ソラトはリュックを取ってきて、その中からポケモン図鑑を手にする。

女性を模した電子音声が、簡単な解説を始めた。

『ムクホーク、猛禽もうちんポケモン。非常に発達した筋肉を備えており、大きな物でも足につかんで楽々飛ぶことができる。自分よりも強い相手にも、果敢に挑みかかる』

やっぱり、ムクホークだ。

トウヤ博士の研究所で、何度か見かけたことがあるポケモンだった。

ただ、その中のどのムクホークよりも、ユウキのムクホークは大きいように思える。

つたない目算だが、それでもゆうに二回り以上は大きい気がした。

「そのムクホーク……大きいですね」

「ふふ、そうだろうか？ オレの自慢の一匹さ。こいつが君とイーブイを助けたんだぜ」

なるほど、このサイズならば人を背中に乗せて飛ぶことも可能だろう。

平均サイズのムクホークでは、小さな子どもならまだしも、大人を背中に乗せて飛ぶなんて芸当はとてもではないが無理だ。

「そうだ、忘れてました！ ユウキさん、ムクホーク。ボクとイーブイを助けてくれてありがとうございましたッ！」

「なあに、君の熱い行動に胸打たれたのさ。もしイーブイを見捨てるような輩だったら、イーブイを助けた後に成敗してやるつもりだった」

片方の口角をつり上げたその笑みは、少しわざとらしすぎるがそれでも彼には似合っている。

少なくとも、ソラトはそう思った。

「それで、君はこれからどこに行く予定だったんだ？」

「ナゴシタウンのポケモンジムだったんですけど……ただ、今はどうしようか迷ってます。ポケモンマスターになりたい気持ちは偽りだったので、ナゴシタウンに行っても……」

「ブイ？」

ふと、イーブイが顔を上げた。

黒い一対の目が、『行かないの？』と問いかけているように思える。

ソラトは言葉に詰まった。

「イーブイはその気のようにだな」

他の人から見ても、やはりそう見えるらしい。

イーブイがここまで変わるとは夢にも思っていなかったので、正直驚きを隠せない。

しかし、もう気づいてしまったのだ。

自分はポケモンマスターを目指してないと。

そんな状態でポケモンジムに挑戦したところで

「……」

知らず知らずのうちに情けない顔を浮かべると、ユウキはうーんと呻り声を上げた。

「ソラト君、今までポケモンバトルをした経験は？」

先日のポップオ集团在り浮かんだが、あれはとてもではないがバトルとは言えない。

ソラトは首を振った。

「そうか、君はまだポケモンバトルの楽しさを知らないんだな」

「……ポケモンバトルの楽しさ？」

「そう、楽しさだ」

ユウキはその場に立ち上がった。

「なあ、ソラト君。これからオレとポケモンバトルをしてみないか？」

「ユウキさんど？」

「そっだ！」

ユウキのその誘いに、まったく心動かされないかと言えばウソになる。

いや、はつきり言おう。

めちゃくちや興味を惹かれる。

ポケモンマスターを目指さなくても、やはり一度くらいはポケモンバトルというものを経験してみたい。

ただ

「……どうする、イーブイ？」

何にしても、イーブイ次第だった。

昨日、相棒はポップに痛烈な一撃をもらっていた。

あれで、もしかしたらポケモンバトルを嫌いになったかもしれない。

もしイーブイがバトルをしたくないのなら、ソラトはその意思を尊重したい。

気持ちは一方向通行ではなく、分かち合わなければいけないのだから。

「……ブイツ！」

初めはどこか悩んでいる様子だったが、何かを決意したようにイーブイは唐突に鳴き声を上げた。

そのつぶらな双眸は、今までにないくらい強い光を帯びている。やる気なのだ。

「本当にいいの？ 痛い目にまたあうかもしれないよ」

「ブイブイツ！」

どうやら、その意思に揺らぎはないらしい。

ソラトも顔を引きしめ、力強く頷く。

そして、ユウキの方をしっかりと見た。

「ユウキさん、お願いします」

「よじきた」

そう言って、しかしユウキはムクホークをモンスターボールに戻した。

「こいつじゃ、ちょっとレベルが違いすぎるからな」

それから、別のモンスターボールを取りだし、中のポケモンをだ

す。

さっきのポケモンと色合いは似ているが、トサカがなく、身体のサイズもポツポとほとんどかわらない。

ムツクルだ。

確か、群れでよく行動するポケモンだった気がする。

ポツポと同じく、ミシマタウンでもよく見かけたポケモンだった。

「こいつはさっきのムクホークの子供だね。まだ生まれたばかりなんだ。バトルの経験も数えるほどしかないから、君たちには丁度いいだろう。さあ、さっそく始めようか」

ソラトはユウキと同じようにその場に立ち上がる。
彼の眼差しを、しっかりと受け止める。

「よろしくお願いしますッ!」

「ブーイッ!」

第五話・さすらいのポケモントレーナー登場・（後書き）

本作を読んでいただきありがとうございます。

さて、ようやく次回からポケモンバトルですね。

ここまで長かったなあ、とか思わないでもないです。

いったいソラトとユウキはどんなバトルを繰り広げるのでしょうか。
では、また次回にお会いしましょう。

第六話・初陣！ ソラトvsユウキ……（前書き）

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第六話・初陣！ ソラトvsユウキ！！ -

たき火が燃え尽きた頃にはすっかりと服も乾き、冷えた身体も熱を取り戻す。

川のほとりで佇みながら、ソラトはポケモン図鑑をいじっていた。ようやくお目当ての機能を発見し、図鑑のカメラを足下のイーブイに向ける。

すると、図鑑の液晶画面に『分析中』という文字が踊った。

次いで表示されるのは、二つの分析結果だ。

一つ目は、たいあたり。

二つ目は、すなかけ。

ポケモン図鑑には搭載された小型カメラでポケモンを認識すると、その個体が覚えている技を分析してくれるという便利な機能まで備わっている。

つまり、その二つが現時点でイーブイが使用できる技というわけだった。

少ないなあ、というのが正直なところだが、やはりそれは致し方ない。

どのポケモンもバトルを通じて成長し、新たな技を習得していく。まだ一度もバトルを経験したことのないイーブイが、まさか多様な技を覚えているわけがなかった。

しかし、それでもポケモンバトルは可能だ。

「イーブイ、頑張ろうね」

「ブイ」

ソラトは地面にひざをつき、相棒の背中をなでる。

イーブイの瞳には、依然として強い光が宿っていた。

ただ、心なしか身体が少しかたいように思える。

おそらく、初めてまともなポケモンバトルをひかえて気持ちが高揚しているのだろう。

あるいは、緊張しているのかもしれない。

何にしても、その姿を見ているところらまで頑張らなくてはいけない気になってくる。

無論、初めからそのつもりではあったが。

「さて、用意はいいか？」

少し離れたところで、今回の対戦相手が不敵な笑みを浮かべていた。

その肩には、ムツクルがとまっている。

あまりバトルの経験はないとのことだが、それでもかなり余裕があるように見えた。

「はいッ！」

ソラトは氣勢を上げ、イーブイと目を合わせる。

イーブイは、臆病な性格からはとても想像できないような強い領を示してくれた。

それから、颯爽と前にでる。

気合い充分、やる気満々だ。

イーブイがこのポケモンバトルに勝つ気なのが、ひしひしと伝わってくる。

もちろん、ソラトだってそのつもりだった。

もしかしたら、身の程知らず、と誰かは馬鹿にするかもしれない。しかし、例えばここで負けたって、恥ずかしいことなど何一つなかった。

誰だって、最初からうまくいくわけではないのだ。

ソラトもイーブイも、これが初めてのポケモンバトル。
負けて当然、勝ったら奇跡。

けれども結果は下駄をはくまでわからない、まさにでたとこ勝負
なのだ！

胸の鼓動が、昨日トウヤ博士の研究所まで駆けていたときと同じ
ように高鳴る。

腹の奥底で、何かが静かに燃えているを感じる。

今、ソラトはようやくポケモントレーナーとして歩きだしたのか
もしれなかった。

「いい顔だな。ムツクル、気を抜くなよ」

ユウキがそう言うと、ムツクルもまた前にでた。

数度の羽ばたきで、地面に降り立つ。

これで、両者向かい合う格好となった。

「使用ポケモンは一体。先に戦闘不能になったら負けだ」

「わかりました」

ソラトは応えてから、深呼吸をしつつ目をつむる。

気を抜いたら、一気に頭が真っ白になってしまいそうだった。

落ち着け、と自分に言い聞かせる。

自分のせいでイーブイが負けるような事態には、極力したくない。

初めてなら初めてなりに、できる限りの力を発揮したい。

そして、あわよくばイーブイと初勝利を飾りたい。

ソラトはゆっくりと目を開けた。

しっかりと相手を見据える。

さあ、初陣の始まりだ。

「先行はそつちでいいぞ」

ユウキのその言葉に甘えさせてもらおう。

「イーブイ、たいあたりだ！」

「ブイッ！」

イーブイは一直線にムツクル目がけて駆けだす。

たいあたりとは、文字どおり相手に身体でぶつかっていく技だ。

ムツクルとの距離がぐんぐんと詰まっていく。

「ほう、たいあたりにしては速いな。ムツクル、上空へ飛んでかわせ！」

「ムツクル！」

直撃の寸前、ムツクルが上空へと飛びたってかわす。

イーブイは追撃しようとして上へ跳ぶが、おしくも届かなかった。

「よし！ ムツクル、かぜおこしだ！」

滞空して指示を待っていたムツクルは、翼を一杯に広げて羽ばたく。

すると、思わず目をつむってしまいそうになる強風がイーブイを襲った。

「ブ、ブイッ！」

何とか地面に足を突き立てて踏ん張るが、イーブイの小さな身体

は風圧に負けて吹き飛ばされる。

けまりのようにごろごろと転がり、ようやく止まってもすぐに起きあがれそうにない。

あれだけ派手に転がれば、誰だって目を回してしまう。

イーブイの体勢が崩れた。

「頑張つて、イーブイツ！」

ソラトのそのはげましも、届いているかどうか怪しい。

ユウキが声を張り上げた。

「この隙を逃すなよ！ ムツクル、でんこうせっかだ！」

ムツクルは翼で勢いよく大気を打擲し、イーブイへ向かって滑空する。

すさまじい速力だ！

イーブイはまだ体勢を立て直しきれていない。

「イーブイ、よけて！」

その指示をだした直後、ムツクルの攻撃がイーブイに命中した。

強烈な一撃だ。

あの速力の勢いのままぶつかってこられて、イーブイの身体が軽々と宙を舞う。

悲鳴を上げながら、イーブイは地面に落ちた。

「イーブイツ！」

ソラトは咄嗟にかけ寄ろうとしたが、痛みを堪えるように立ち上がろうとする相棒の姿を見て、思いとどまる。

もう体力の限界なのは、誰の目にも明らかだった。しかし、それでもイーブイは立ち上がってみせた。まだやる気だということを、ソラトに態度で訴えていた。ふらふらになりながら、しかし確かにアピールしているのだ。いったい何がイーブイをそこまで頑張らせるのか。

そんなこと、言うまでもない。

ソラトのことを思ってくれているからだ。

だから、あれだけやる気をだして勝つ気でいた。

その思いを、イーブイのトレーナーとして無駄にはいけない！

「……くっ」

小さくうめいている間にも、ソラトは頭を回転させる。

ここから逆転できる策を、何でもいから捻出しようとする。

しかし、何も思いつかない。

まず、どうやってこちらの攻撃を当てるかが問題だった。

イーブイは空を飛ぶことができない。

だから、ムツクルに空へ逃げられては、こちらからの攻撃手段がないのだ。

唯一の可能性があるとしたら相手がでんこうせっかをしかけてきたときだが、それも望みは薄そうだった。かぜおこしをされて体勢を崩されては、とてもではないがでんこうせっかを迎え撃つなんて芸当は不可能だ。

もしでんこうせっかだけで向かってきたとしても、今のイーブイではそれを迎撃するのも難しいだろう。

いや、万全であったとしてもできるかどうかわからない。

とにかく、あの速力にはとても対応しきれないのだ。

「ムツクル、かぜおこしだ！」

ユウキの堅実な指示を受け、ムツクルはまたも強風をイーブイに叩きつける。

イーブイの身体はさっきよりも呆気なく地面に転がる。やはり、体勢が崩れた。

「……何でもいい、何か……」

うめきばかりが口からもれるだけで、依然として打開策は思い浮かばない。

でんこうせつか、というユウキの指示が死刑宣告のように聞こえた。

ムツクルが滑空の体勢に入る。

もう時間がない。

体勢を崩したイーブイへと、脇目もくれず突っ込んでくる。

かわすことも不可能。

迎撃もすることも困難。

いつたい、どうすればいい。

「体勢を崩す……」

と、そこで脳裏に閃くものがあった。

そうだ、体勢を崩したらいいんだ！

「イーブイ、すなかけだ！」

ムツクルが激突してくる数瞬間、イーブイが前肢ぜんしを使って地面をすくい上げる。

無数の砂塵さじんが舞い上がり、ムツクルの行き先を遮った。

「ムツクル！」

驚いたように、ムツクルはでんこうせっかを解いて翼をじたばたさせる。

どうやら、狙い通りにいつてくれたようだ。

ムツクルの体勢が崩れた。

巡ってきたこの機会を、むざむざ逃すわけにはいかない！

「今だ！ イーブイ、たいあたり！」

「ブイッ！」

かろうじて立っているといった様子のイーブイは、最後の力を振りしぼってムツクルへと肉薄する。今なら、標的は射程範囲内におさまっている。

ムツクルはイーブイに気がついて回避しようとする動作を見せたが、もう遅かった。

「いっけーッ！」

「ブーイッ！」

裂帛の気合いをほとばしらせ、イーブイのたいあたりが炸裂する。苦しそうなうめき声をクチバシからもらし、ムツクルははじき飛ばされる。

そのまま地面の上を何度か跳ねて、ぴくりとも動かなくなった。

「……急所に当たった、か」

そう呟くと、ユウキはにやりと笑って見せる。

それから、ムツクルをモンスターボールに戻した。

「やるじゃないか、ソラト君。いいバトルだった。オレの負けだ」

「……え？」

思わず、ソラトは呆けた声を上げてしまった。

ユウキの言葉が、まるで異国の言語のように聞こえた。それを理解するのに、だいぶ時間がかかる。

勝っちゃたの？

ボクとイーブイが？

本当に？

今にも倒れそうな相棒の方に目をやると、自然と視線が交錯する。くわく

相棒のつぶらな瞳は、きよとんとしている。

おそらく、今の自分もこんな目をしているのだろう。

やはり、信じられない。

「……イーブイ」

「……ブイ」

お互いに、ゆっくりと歩み寄っていく。

夢遊病者のように、ふらふらと、だ。

そして

「イーブイ!!」

「ブーイッ!!」

ソラトが腕を一杯に広げると、イーブイが胸に飛び込んできた。

交わされるそれは、熱い抱擁だ。

「ボクたち勝っちゃったよおー!!」

「ブイブイツー!!」

ソラトとイーブイの顔に、ぱつと笑顔が咲き誇る。夢みたいだ、と思う。

じわじわと熱い何かが胸の奥からこみ上げてくる。

身体の芯が、じん、と痺れている。

何だろう、この感覚。

よくわからないけど、とにかくめっちゃ嬉しい!

「ポケモンバトルの楽しさが、少しはわかったんじゃないか?」

ユウキがすぐ傍まで歩いてきていた。

してやったり、といった顔を浮かべている。

「はいッ!」

それは、素直な気持ちだった。

こんなバトルなら、何度だってやってみたかった。

イーブイと一緒に、もっと戦ってみたい。

そんなことを思っていると、ふとユウキが穏やかな笑みを浮かべているのに気づいた。

「ナゴシタウンまで旅をするかどうかも、そこでジムに挑戦するかどうかも君の自由だ。だが、オレはジムに挑戦することをオススメするぜ。だってな、こんな野良試合でさえそんな感動を味わうことができるんだ。なら、超難関と言われるジム戦でポケモンと一緒に

頑張ってもぎ取った勝利なら、いったいどうなると思う?。」

ソラトは、抱擁を交わしたまま胸の前におさまっているイーブイと目を合わせる。

それから、ユウキの言葉に思いをさせてみた。

ジム戦で戦っているソラトとイーブイ。

今日みたいに負けそうになりながらも、決してあきらめずに立ち向かっている自分たち。

敵は逃げだしたいほど強く、とてもではないが勝てそうにない。

しかし、あがきにあがいた末に巡ってきたチャンスをものにして、まさかの逆転勝利!

それは、あまりにも滑稽こっけいな絵空事かもしれない。

それでも、今日のバトルに勝ったせいとか、そんな映像が思い浮かんでしまうのだ。

にんまり、とした笑みが浮かぶのを止められない。

さっきの比じゃない感動が、ジム戦の勝利の後には待っている予感がしてならない。

おそらく、イーブイも同じよう思いをさせ、同じような結論に思い至ったのだろう。

ソラト同様に、にんまりと頬が緩んでいた。

「ポケモンマスターを目指さないからジムに挑戦してはいけない、なんて規約はどこにもない。だから、君の思うようにやったらいいさ」

「はいッ!」

「ブイッ!」

その二つの応えが、今後の方針を決めたも同然だった。

ソラトの胸の奥は、まだ熱を持っている。
止まりそうにないほど、ドキドキとしている。

こんな興奮を……いや、これ以上のものをイーブイと一緒に味わいたい。

めくるめく勝利の感動を、イーブイと共に分かち合いたかった。
そのためには、まずはイーブイに打ち明けておかなければならぬ
ことがあった。

ソラトは口の中に苦いものを感じながら、胸の内にくすぶる故郷
を離れた理由を相棒に告白する。

自分はポケモンマスターになるためにミシマタウンを旅だったの
ではないということ。

ただ、それまでのみじめな自分と決別したかっただけだというこ
とを。

だから、自分はイーブイに慕われてもいいような人間ではないの
ではないかということ。

イーブイはソラトを見上げ、黙ってそれに耳を傾けていた。

そして、聞き終わると静かに、しかし確かに首を横に振って否定
してみせてくれる。

つぶらな黒い瞳が、そんなことないよと優しく訴えてくれていた。
ソラトは、胸の奥からうれしさがこみ上げてくるのを感じた。

イーブイの想いが、影を落としていた心に温かな光明を灯らせる。
反射的に、ソラトはイーブイを抱きしめてしまった。

イーブイに相応しいパートナーになりたいと、心の底から思った。

「ポケモンマスターを目指したいわけじゃないけど、でもジムには
挑戦してみたいんだ。もしかしたら、負けちゃうかもしれない。そ
れも、コテンパンに。でも、それを乗り越えた先にある感動を、君
と一緒に分かち合いたい。だから、一緒に戦ってくれないかな」

「ブーイッ！」

告解こっかいにも似たそれに返されたのは、一片の曇りのない二つ返事だった。

それも、たのもしいほど熱のこもった首肯しゅけんのオマケつきだ。傍らかたわに佇んでいたユウキが、ぽん、とソラトの肩に手をおいた。

「まあとにかく、自分の心に素直になって行動してみることだな。君はまだ若いんだ。途中で立ち止まったっていい、道を間違えてもいい。ただ、そのときは自分の周りをよく見てみるんだぞ。そこには、何が正しいのか教えてくれる仲間がいるはずだからな」

「はいッ！」

「うむ、いい返事だ。これでオレも心おきなく旅立てるな」

ユウキはおもむろにモンスターボールを取りだすと、開閉ボタンを押した。

銀光をまとって姿を現したのは、あの巨大なムクホークだ。ソラトの胸に、一抹いちまつのさみしさが去来する。

「……もう行っちゃうんですか？」

「オレはさすらいのポケモントレーナーだからな。移動を繰り返す渡り鳥は、同じとまり木にそう長い間とまってはいられない」

そう言いながら、ユウキはムクホークの背中にまたがった。

「もし君が八つのジム全てを勝ち進んでいったら、もしかしたらまたオレと会えるかもしれないな」

「……それって」

どういうことですか、とソラトは聞こうとして、しかし次の言葉に遮られた。

「そつだ、一つ君に聞いておきたいんだが、さっきのバトルで使った『すなかけ』、あれは咄嗟に閃いたのか？」

「えあ、ええつと、閃いたというか、その……」

まさかそんなことを尋ねられるとは露^{つゆ}ほども思っ^てなかつたので、ソラトは口をごもらせてしまう。

心を落ち着かせ、当時の記憶をなぞりながらゆっくりとこう応えていった。

「ユウキさんはでんこうせつつかで攻撃をしかける前に、ムツクルにかぜおこしの指示を与えてイーブイの体勢を崩させてました。それってつまり、本命の技を確実にヒットさせるためにそうしたんですよ?」

にやり、とユウキはこちらに笑ってみせたので、おそらくそれは正解なのだろう。

ソラトは『すなかけ』を指示するに至るまでの経緯を説明した。

「ほう、ムツクルのかぜおこしで体勢を崩したイーブイを見て思いついたのか。なかなかいい観察眼と閃きを持っているな。そうか……君だったら、ナゴシタウンのあのジムリーダーにも案外簡単に勝つてしまつかもしれないな」

子の成長を喜ぶ親のように、ユウキは柔らかな面持ちで目を細め

てみせる。

それから、ムクホークの脇腹をかかとで軽く蹴った。

ムクホークが翼を大きく広げる。

旅立ちの合図だ。

「頑張れ、イーブイとソラト君。オレはいつでも君たちを応援してるぞ！」

「はいッ！」

「ブイッ！」

一陣の風をその場に残し、ユウキとムクホークが勢いよく空へと飛びたつ。

ソラトは後ろ髪を引かれる思いを抑え込み、しっかりと手を振る。そこには、親身になってアドバイスをくれた感謝の念がこもっている。

ユウキのアドバイスを無駄にしないためにも、ソラトはこれからも前に進むのだ。

「……行っちゃたね」

「……ブイ」

まもなくして、さすらいのポケモントレーナーの姿は西の空へと消えていった。

ソラトは別れのさみしさを振り切り、イーブイに顔を向ける。

イーブイには、どうしても伝えておかなければならないことがあった。

「ねえ、イーブイ」

「ブイ？」

「これからもよろしくね」

「ブーイ！」

同時にこぼれるのは二つの笑み。

見えない絆が、イーブイと結ばれた気がする。

これから、いったいどんな旅が待っているのかはわからない。

けれど、イーブイとならどんな障害でも乗り越えていけるに違いない。

ソラトは、西の空に向かってこう思った。

ありがとうございました。

第六話・初陣！ ソラトvsユウキ！！ - (後書き)

本作を読んでいただきありがとうございます。

見事、ソラトとイーブイは初勝利を飾りましたね。

ビギナーズラック、といったところでしょうか。

さて、今回は第一話で名前だけ登場したあの子が姿を現します。

いったいどのようにソラトとイーブイに絡んでくるのでしょうか。
では、また次回にお会いしましょう。

第七話・因縁の幼なじみ・（前書き）

去年の暮れから大学のレポート作成にてんやわんやで、さらに新型インフルエンザにかかり散々な年越しとなりました。今もレポート3つ抱えている状態です。……どなたか暇をください。

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第七話・因縁の幼なじみ・

北へと伸びる平原はどこまでも壮大で、一向にとぎれる様子はない。

くすぐるような柔らかかなそよ風が緑の絨毯じゅうたんをふわりとなでて、小気味よい葉音をそこかしこで奏でている。

うらかな昼下がり、二つの足音が北へ進んでいく。

「……ふあふ」

「……ブイ」

温かな日差しがあくびを誘い、ソラトとイーブイはまぬけた声を仲よく合唱した。

ユウキと別れて二日。

故郷を出発した初日と翌日の苦難が嘘みたいにのどかな旅路だった。

野生のポップオ集団に襲われることもなければ、川に流されることもない。

目下の問題だったイーブイともうち解け、今のところ心配ごとはなにもない。

ただただ、ナゴシタウン目指して北上中だった。

「ブイブイ」

ふと、隣をちょこちょこ歩いていたイーブイが甘えるような声を上げた。

何かな、と思った瞬間、くきゅるるうという可愛らしい音が聞こえてくる。

「どうやら、お腹の虫がおかんむりらしい。」

「そろそろお昼ごはんにしよっか」

その言葉に既視感きしかんを覚えながら、ソラトはリュックから色あせた地図を取り出した。

母がトレーナー時代に使っていたもので、もう十年以上も前の一品だ。

そんな地図で確認してみると、この平原の北西に小さくポケモンセンターと記されているところがあった。

距離的にこの近くだと思われるが、やはり土地勘がないのでいまいち自信がない。

辺りを見回してみたものの、ソラトの視界にはそれらしい建物は映らない。

昼食はポケモンセンターで取るうという思惑は、どうやら叶いそうもなかった。

「ねえ、イーブイ。キミの目に何か建物は見えない？」

言いながら、ソラトはイーブイを両手で持って頭上高くかかげる。相棒はきよろきよろと周囲に視線を巡らせる。

イーブイがソラトよりも視力がいいかどうかは知らないが、ダメもとでやってみたって損はないだろう。

と、地表約一メートル七十センチの高さからイーブイが鳴き声を上げた。

こちらを見下げながら、片方の前足を西に突きだしている。

つまり、そちらに何かを発見したということなのだろう。

もしかしたら、ポケモンセンターかもしれない。

だが、ソラトがそちらを目を向けてみても、何か建物があるようには見えなかった。

「……本当にそっちに建物があるの？」

「ブイブイ！」

「ちょ、イタツ！ 後ろ足で頭を蹴らないでよお！」

ソラトはイーブイを地面におろし、西の方角に首を傾ける。やっぱり、建物らしき影はこれっぽちも見当たらない。

ただ、一面に緑が広がっているだけだった。

しかし、イーブイがあれほど主張したのだから、何かあるのは確かなのだらう。

……よおし、ちょっと行ってみるか。

「もう少しだけお昼ご飯は我慢してね」

そう言うと、イーブイは不承不承といった感じで頷く。

その様をクスリと笑いながら、ソラトは西へと舵を取った。

うららかな昼下がり、二つの足音が西へ進んでいく。

どうやら、イーブイの視力はソラトよりも格段にいいらしい。

しばらく行くと、ポケモンセンターが姿を現したのだった。

辿り着いたポケモンセンターは、あまり利用客がいなくて閑散としていた。ロビーに人の数はせいぜい五人前後で、各々がポケモンたちと静かな午後の一時を過ごしている。受付カウンターのジョーイさんも手持ちぶさたのようで、雑誌を読んでいる様子だった。

ちなみに、このジョーイさんはミシマ草原のポケモンセンター

のジョーイさんと容姿がうり二つで、それどころか全国のジョーイさんはほとんど同じ顔立ちをしているのだという。全員が親戚で、母いわく『まさに遺伝子の奇跡』らしい。

ときどきポケモンセンターの裏庭から、かけ声やら雄叫びが聞こえてくる。

どうやら、そこでポケモンバトルをしているようだった。

あとで見物に行ってもいいかもしれない。

「ほら、大丈夫だよ」

その声をかける先は、もちろんイーブイだ。

イーブイはソラトの足の影に隠れ、辺りの様子をおずおずとうかがっていた。

「誰も襲ってきたりしないから」

ソラトはその場でひざをつき、イーブイの背中を優しくなでてやる。

それで少し緊張がほぐれたようだが、それでも小さな相棒の表情はかたかった。

出会ってから四日。苦難と一緒に乗り越えた末、ソラトにはおびえることはなくなったものの、それでイーブイの臆病な性格がなおったわけではなかった。多少おびえ方はマシになったが、やっぱり初めて見る人やポケモンにはどうしても怖がってしまうらしい。

ユウキに対しては別におびえてなかったな、と今さらながら思い出したが、あれは状況が状況であり、それだけイーブイも必死だったということだろう。

ソラトはイーブイを胸の前に抱きかかえた。

「さあ、お昼ごはん食べよっか」

「ブイ」

安心したような穏やかな声を返すイーブイ。胸に頬ずりをしてくる相棒の姿に愛おしさを感じながら、奥のラウンジに移動しようとした。

と、そのときだった。

背後の自動ドアが開いて、涙目の少年がかけ込んでくる。目を回したコラッタを腕に抱えてソラトの脇をすりぬけ、そのまま玄関の向かいにある受付カウンターへ走っていった。

カウンター越しにやり取りを交わすジョーイと少年を見ながら、ポケモンバトルでもやった後なのかなと思う。もしかしたら、あの少年はさつき裏庭でポケモンバトルをしていたトレーナーなのかもしれない。だとしたら、少年とコラッタの様子からバトルに負けたのだろう。

「……あのコラッタ、コテンパンに負かされた感じだったね」

「……ブイ」

一緒に哀れみを込めた視線を送りつつ、ソラトは今度こそラウンジに行こうとする。

しかし、いきなり聞き覚えのある声に呼び止められてしまった。

「あら、ソラト。こんなところで会えるなんてね」

どこか不遜さをにじませた口調に、耳当たりのいいソプラノ声。

どうか彼女じゃありませんようにと本当にかすかな期待を抱きながら、ソラトは調子の悪い機械のようにぎこちなく背後を振り向いた。そして、ソラトの期待は儚くも砕け散ったのだった。

目の前に、ソラトと同年代の少女が立っていた。青色のミニスカートに、茶色のブラウスといった服装をしている。

「……アカリ」

彼女を見た瞬間、自然と顔がひきつって、それを隠すために笑みを浮かべてみたが、どうやら余計にひきつった顔を強調する結果になってしまったらしい。町一番の秀才といわれた幼なじみは、いらついたように切れ長の目を細めた。

「旅に出ても、なにも変わってないのね」

「……っ」

そう挑発されてかっど頭に血が上ったが、なにか言い返そうにも開いた口からは声はまったくでこず、ただただ唇を噛むしかない。くやしかったが、しかしそれは事実だった。

アカリとソラトは同じ日に生まれた。

だから、まわりは彼女と自分を比べて、勝手に優劣をつける。いつも優っているのはアカリで、劣っているのはソラト。

アカリのまわりにはたくさんの友達がいて、ソラトには一人もいなかった。

ことあるごとにアカリの友達は、ソラトをなじって貶めた^{おとし}。彼女自身がソラトをどうこうということとはなかったが、助けるということもなく、傍からいつもソラトがイジメられている様をただ見ていた。

アカリは端正な顔に呆れを浮かべて、首を横に振った。背中まで流れるあでやかな紅い髪が、ゆらゆらと揺れる。

「……ブイ」

胸の前でおさまっていたイーブイが、心配そうにこちらを見上げていた。
なんでもないよという顔を作ってみせたが、うまくできたか自信はない。

イーブイの黒いつぶらな瞳が、アカリとソラトの顔を交互に映しだす。

「ブイツ！」

そして、意を決したように床に降り立つと、アカリの前に立ち塞がって、低いうなり声を発した。その愛くるしい姿からは想像もつかないそれは、明らかな威嚇いかくだった。
ソラトを守るうとしているのだ。

「へえ」

アカリは面白そうに、眼下の小さな騎士を見つめる。

「この子、トウヤ博士のところに行ったあの臆病でクズなイーブイね。バトルにはとても向いてなさそうだったけど……少しぐらい勇気があったようね。けど、そんなんじゃまったく駄目」

それから、腰のホルダーからモンスターボールを取りだして、開閉ボタンを押した。

「 エリス、出てきなさい」

銀光をまとって彼女の足下に現れたポケモンは、イーブイだった。おそらく、トウヤ博士が用意していた三匹のうちの一匹だろう。

エリスと呼ばれたアカリのイーブイは、本来の愛らしさがなりをひそめた冷たい雰囲気をかもしだしていた。エリスはソラトのイーブイを見るなり、いきなり歯を剥いて鋭い呼気をはきだす。そして毛を逆立ててことさら敵意を見せつけた。びくつと身体をすくませるソラトのイーブイ。

「これぐらいやらないと、威嚇にはならないわ」

アカリが意地悪くにやりと笑ってみせた。

イーブイは気圧されるように何歩か後退する。

そんな様子を、しかしソラトは情けないとは思わなかった。

今、ソラトの心はある感情でいっぱいになっていて、それどころではない。

「やっぱリクズはクズね。あなたを選ばなくて正解だったわ。あなたみたいなポケモンを選んでたら、ジムバッジを手に入れることなんてとても」

ダメだ、もう限界だ。

「イーブイを馬鹿にするなッ！」

ソラトは、生まれて初めて本気の怒声というものを放った。心がどうしようもなく猛り狂い、とてもではないが自制がききそうになり。アカリに飛びかかってないのが、自分でも不思議でならなかった。

いくつも視線を感じる。

ケンカはやめなさい、というジョーイの声が遠くから聞こえた気がした。

しかし、いきりたった今の自分には、それは些末なことではな

かった。

アカリはぼかんとした顔をしていた。

ソラトが怒ったということが、信じられないのだろう。

今までソラトは、彼女の前ではるくに怒りを面にだしたことがなかった。

いつも、じつと耐え忍んで過ごしていた。

そして、あとでトサキントに慰めてもらっていた。

ただどこにはトサキントはいなくて、だから一人でため込むように我慢するしかなくて、ただそれで済むならそれでいいかなと思った。でも、イーブイが馬鹿にされるのを黙っては見ていられなかった。

イーブイは友達だ。

こういうときに怒らなくて、いつ怒るというのだ。

アカリは頬を上気させ、こちらをキツと睨みつけた。

「本当のことを言っただけが悪いのよ」

「イーブイはクズなんかじゃない！ 確かに臆病だけど、勇気があって優しくて、友達を思う心を持つてる！ それに、ちゃんとバトルだってできる！ 勝ったこともある！」

「ブイ！」

ソラトの怒濤うたけの勢いに当てられてか、イーブイも力強い声を高らかに上げた。

アカリが顔いっぱい不快感をあらわにし、ソラトに指をさす。

「なら、私とポケモンバトルをして勝ったら認めてあげるわ」

思わぬ挑戦状に一瞬たじろぐが、ここでひいたら末代までの恥だ。

「いいよ、やるっ!」

「ブイブイ!」

ソラトとイーブイの気迫が、ポケモンセンターのロビーにほとばしる。

そうして、絶対に負けられない戦いが幕を開けたのだった。

第七話・因縁の幼なじみ・（後書き）

本作を読んでいただきありがとうございます。

ちよつと執筆の裏話でも。

実は主要人物の名前は、主人公を除いてむかし流行った囲碁漫画から拝借していたりします。ええ、名前考えるの苦手なんです。

さて、次回は幼なじみ対決もといライバル対決ですね。

果たして、ソラトは見事アカリの鼻を明かすことができるんでしょうか。

では、また次回にお会いしましょう。

第八話・幼なじみ対決！ ソラトvsアカリ！！ - (前書き)

今、第一話から見ると、結構文体が変わっていますね。統一感がないのはそれだけ自分が未熟ということですね……。大目に見てもらえたらうれしいです。

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第八話・幼なじみ対決！ ソラトvsアカリ！！ -

ポケモンセンターの裏には専用のバトルフィールドがあって、^が兼ねなく練習バトルが行えるようになっていて。ソラトとアカリはバトルフィールドの端に立ち、互いに向き合っていた。

「使用ポケモンは一体、さきに戦闘不能になったら負けよ」

「わかった」

ルールの確認を終え、ソラトは足下のイーブイを見る。

イーブイはつぶらな瞳に闘志を燃やし、ユウキ戦のときのように強く頷いてくれた。

そんな相棒に、ソラトもまた頷き返した。

「いくよ、イーブイ！」

「ブイ！」

そうして、勢いよく前に飛びだすイーブイ。

それを確認してから、エリスがゆっくりと前にでた。

イーブイ対決だ。

トレーナーの実力、そしてポケモンの実力が^{にょじつ}如実に表れる対決法はこれ以外をもっていないだろう。

絶対に負けられない。

イーブイのためにも、アカリの鼻を必ず明かしてみせる。

「ソラト、あなたさつきコラッタを持ったトレーナーを見たんじゃない？ あれね、私がやったの。あなたも同じような目にあわして

あげるわ」

アカリは嘲るように片方の口角を^{こじかく}つり上げてみせる。

しかし、そんなことで尻込みするようなソラトとイーブイではなかつた。

一度ついた心^{ハート}の火は、とことんやり合うまで消えはしないのだ。

「先行はどうぞ」

青空の下、アカリのその言葉を合図に、戦いの火ぶたが切つて落とされた。

「イーブイ、たいあたり！」

「ブイッ！」

イーブイが整備された地面をたくましく蹴り飛ばし、エリス目がけて一直線にかける。

「へえ、速いわね。さすが臆病な性格といったところかしら」

アカリは余裕のある笑みを浮かべ、しかし注意深くイーブイの動きを観察している。

イーブイを侮っていても、バトルに対しては真剣なのだろう。

イーブイは瞬く間に距離をつめて、エリスを射程距離に捉えた。

「今よ、エリス！ よけなさい！」

しかし、間一髪のところまで身体をひねって避けられる。

「そこで、たいあたり！」

アカリの指示通り、すぐそばをとおり過ぎようとしていたイーブイの脇腹を狙いすまし、エリスはたいあたりをかました。思わぬ反撃を食らったイーブイは、いつかのムツクルの一撃を受けたときのように地面を転がった。

「一気にたたみかけるわよ！ エリス、でんこうせつか！」

エリスは姿勢を低くし、まるで矢の如くイーブイへと突貫する。ユウキのムツクルと同等か、下手したらそれ以上の速度だった。

しかし、ソラトは慌てない。

同じような場面が、以前にもあったからだ。

イーブイも次にどうすればいいのかわかっているのか、向かってくるエリスに動じることなく体勢を立て直そうとしていた。

「今だ！ イーブイ、すなかけ！」

「ブイツ！」

敵をギリギリまで引きつけて、イーブイは前足で地面をすくった。細かい砂の粒子が宙に舞い上がり、エリスの行く先をさえぎる。エリスはびっくりしたように勢いを落として、でんこうせつかを解いた。

アカリがしまったといった顔をしているのが視界に入る。
ざまあみる、だ。

「よし、たいあたりだ！」

体勢を崩してから本命の攻撃を当てる。

イーブイはバネのように身体を跳ねさせ、まだ迎撃態勢の整っていないエリスにぶつかっていく。今度はエリスが地面に転がる番だった。

「イーブイ、もう一度たいあたり！」

これがトドメだといわんばかりの勢いで、イーブイは敵に向かって突撃した。

「エリス、あなたもたいあたりよ！」

どうやら、アカリは正面から打ち合うつもりらしい。

けれど、まだエリスはちゃんと迎え撃てるような体勢ではない。

ようやく今、起きあがるうとしてるところなのだ。

そんな状態から放たれる攻撃が、どれほどの威力を発揮するのか考えるまでもない。

苦しまぎれもいいところだった。

「ブイッ！」

正面きって激突するイーブイとエリス。

片や、全力疾走からくりだした一撃。

もう片や、体勢を整えきれない状態での一撃。

その結果は

「ブイッ!?!」

イーブイの負けだった。

せめぎ合ってまもなく、イーブイの身体がはじき飛ばされる。

ソラトは目を見開いた。

あれほど有利な条件だったのに、打ち負けてしまった。つまり、それぐらいエリスの打撃は火力を秘めているということなのか。

一瞬、ソラトの心に影が落ちるが、すぐに頭を振って気持ちをもち直す。

まだ勝負は終わっていない。

なにより、イーブイがまだ諦めていないのだ。

イーブイは打ち負けたショックを微塵みじんも感じさせず、凜然りんぜんと立ち上がっている。

その姿が、ソラトに勇気を与える。

トレーナーがポケモンを信じてやらなくて、バトルに勝てるわけがない。

「もう終わりにするわよ！ エリス、でんこうせっか！」

地を蹴り、風を切る。

エリスは再び矢の如くイーブイに接近していく。

だが、ソラトはそのときをじっと待った。

単純な力比べで勝ち目がないのだったら、相手の土俵どひょうに上がらなければいいのだ。

エリスがイーブイを強襲する。

「イーブイ、すなかけだ！」

「ブイッ！」

タイミングを見計らって、イーブイは再び目くらませにかかった。しかし

「同じ戦法を取るのはいく流のすることよ！ エリス、そのまま真つ

直ぐ突っ込みなさい！」

アカリは声を張り上げ、エリスに指示を飛ばす。目の前に乱舞する砂塵さじんに一度はひるみかけたエリスだったが、主人の指示に従ってそのまま真っ直ぐ突っ込んだ。

まさかの強行に、イーブイはなにも対応できない。

まともにでんこうせっかの直撃を受け、今までにないくらい吹き飛んだ。

何度も地面を跳ねてようやく止まり、しかし身動き一つしない。完全な沈黙。

ゲームセットだった。

「イーブイ！」

ソラトはイーブイのそばまでかけより、優しく胸の前に抱え上げる。

勇敢に戦った相棒は、目を回していた。

「お疲れさま、イーブイ」

ソラトはそっと微笑み、イーブイを抱きしめる。

と、足音が近づいてくる。

アカリはエリスをモンスターボールに戻しながら、こちらをやっつけてきていた。

「どう、これが現実よ。あなたのイーブイはクズなのよ」

「……」

ソラトは歯を食いしばる。

なにも言い返すことができない。

例えできたところで、バトルに負けてしまった今、全てが空しく聞こえるだけだろう。

目頭が熱くなって、頬に涙が伝った。旅が始まってから何度も泣いだが、ここまでくやしい涙は初めてだった。これは絶対に負けてはいけない戦いだったのに、勝ってイーブイを認めさせてあげられる戦いだったのに、敗北してしまったのだ。

イーブイの意識が戻ったとき、いったいどんな顔をすればいいのだろうか。

アカリが不遜な笑みを浮かべた。

「バトルに負けて泣くななんて、あなたにはまだ千年早いわ。あなたはポケモンを知らなすぎる。せめて性格が能力にどう影響するぐらい把握しておきなさい」

そして、背中を向けて去っていく。

言葉の真意を尋ねようにも、もうそんな気力はなかった。

ただただ、うつむきながら彼女がいなくなるのを待つしかない。

ふと、アカリがなにか忘れ物をしたように振り返った。

「そういえば、あなた最初はどこのジムに挑戦するの?」

「……ナゴシタウン」

ソラトは視線を上げずに応える。

遠くから、馬鹿にするような鼻息が聞こえた。

「あなた、なにも知らないのね」

「……どういこと?」

眉をひそめてそう問うても、応えが返ってくることはなかった。
今度こそ、アカリは裏庭から去っていく。
ソラトは考えることはやめて、力なくその場にひざをついた。
そのまま深くうなだれて、一人泣き続けたのだった。

第八話・幼なじみ対決！ ソラトvsアカリ！！ - (後書き)

本作を読んでいただきありがとうございます。

ソラト、初敗北ですね。

ビギナーズラックはそう続かないようです。

これからの成長に期待しましょう。

さて、ここまで結構な文字数を書いてきたわけですが、一向にジムのある町にたどり着きません。予定としてはあと2話ぐらいで到着しようと思ってるんですが、いかんせん執筆する暇がないという。

内心の吐露はさておき、次回もソラトが大変な目にあります。こんな苦難ばかりが続くと、やさぐれてしまわないか心配です。

では、また次回にお会いしましょう。

第九話・慟哭の復讐者 <前編>・(前書き)

執筆の上で一番の悩みは、書くスピードが遅いことです。

この話も、書くのに三日ほど費やしてたりします。

速筆の人がうらやましいです。

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

澄みきった青空の下、その平原では吹き上がるように草と土が宙を舞う。

怒号のようなかけ声がめまぐるしく飛びかい、二匹の獣が己の強さを誇示するためにしのぎを削りあっていた。たとえ攻撃された痛みにも顔を歪めても決して闘志が衰えることはなく、むしろ争いは激化の一途をたどっていく。

愛らしい顔つきからは想像できないほど果敢に攻めいる褐色の獣。口から突きでた大きな前歯を武器に一歩も退かず応戦する橙色の獣。

攻防は双方ともに一進一退で、一つの失策がそのまま敗北につながるような厳しい戦況を展開していた。

果たして、さきに勝利の糸口をつかむのはどちらなのか。

「イーブイ、でんこうせっか!」

ソラトの指示を受けて、イーブイは力強く大地を蹴り飛ばしてかけた。

弾丸の如く風を切り、敵めがけて一直線に突っ込んでいく。

「ラッタ、お前もでんこうせっかで迎え撃て!」

対するラッタもまた、トレーナーの指示に従ってイーブイへと突撃した。

筋力の爆発的な解放によって相手に高速でぶつかっていく技『でんこうせっか』。

「瞬く間に双方の距離が近づいていく。」

「今だ！ 左右に跳んでフェイント！」

ソラトはタイミングを見はからって声をはり上げた。イーブイが無理やり身体の向きをかえて、右へ跳び、そして左へ跳ぶ。それを交互にくり返し、肉薄するラッタを牽制する。

ラッタは戸惑いを隠せず、でんこうせつかの勢いを落とした。これで技を見切りやすくなった。

「イーブイ、そこでさけて！」

正面から打ち合わず、イーブイは激突の一瞬前にラッタのでんこうせつかをかわす。

そして

「ふところに入ってふっ飛ばせ！」

「ブイッ！」

ラッタのふところに飛び込むと、足を極限まで踏んばって一気にためた力を爆発させた。バネのように跳ねて零距离からラッタに全身をねじ込み、強烈な一撃をかます。

悲痛な鳴き声をもらったラッタは、緑の絨毯じゅうたんに何度もたたきつけられて転がった。

そのまま小刻みにけいれんして、もう立ち上がる気配はない。

戦闘不能。

その瞬間、ソラトとイーブイの勝利が決まった。

「やったよ、イーブイ！」

「ブイブイ！」

ともに高らかな歓声を上げて、喜びをわかち合う一人と一匹。
こうして、混戦を極めたポケモンバトルに決着がついたのだった。

アカリに敗北してから二日がたっていた。しかし、いまだあの一戦でイーブイの力を満足に引きだしてやれなかった不甲斐なさがソラトの心にわだかまりをつくっていて、さらに彼女の発言を思い出すと胸がずきりと痛む。

『あなたはポケモンを知らなさすぎる』

あのバトルに負けたあと、涙が枯れるまで泣きはらして、目が覚めたイーブイに何度も頭を下げて、それからぐったりと疲れ切ってポケモンセンターで休息していたときも、ずっと頭からこびりついて離れなかったアカリの言葉。

ジョーイさんに相談してようやくその真意がつかめたとき、ソラトは自分の無知さを自覚しないわけにはいかなかった。

ポケモンの性格は、その個体の身体能力と密接な関係があるらしい。

たとえば、ソラトのイーブイのような臆病な性格のポケモンであれば、ジョーイさんいわく素早さは高いが攻撃力は低いとのことだった。だから、イーブイがエリスと『たいあたり』を打ち合ったとき、おそらくレベルによる自力の差もあつたのだろうが、あっさりと打ち負けてしまったのだ。

つまり、イーブイの臆病な性格で正面からぶつかりあうことが間違っていた。

アカリは町一番の秀才。ポケモンのことも詳しく、耳にした話ではトレーナーズ・カードのランクも輝かしいA。Cランクの自分が

あんなことをいわれても、しかたのないことだった。

とはいえ、だからといってこのまま大人しく引き下がるわけにはいかない。

あの一戦では、イーブイの実力差というよりも、ソラトがトレーナーとして不甲斐なさすぎたのが敗因だ。イーブイの性格をちゃんと把握してなかったことや、すなかけによる戦法を安易に二度も取ったのが悪かった。

もう同じ轍は踏まない。

イーブイのことをちゃんと理解して、イーブイに合った戦い方をする。

そして、トレーナーとして適切な場面で、適切な判断を下せるようにする。

だから、野良試合だって積極的に行っていくようにする。

実戦で学べることは多い。

アカリに敗北してから、ソラトとイーブイはもう七戦ほどポケモンバトルをこなしていた。残念ながら勝率は五割をきっているが、それでもいくつつかつめたことがあった。

その一つとして、イーブイの戦闘スタイルだ。まずイーブイの性格を考えると、真っ向からの力勝負では分が悪い。だから、相手の隙について攻撃し、もし反撃されそうならすぐに後退する。つまり、ヒットアンドアウェイ打ち逃げ戦法が適していることがわかった。

あとは、それをいかにしてバトルの中で実現させるかだった。

ラッタとの戦いで行った左右に跳ぶフェイントも、それを生かすために考案した動きの一つだ。成功率はそこそこ高く、初見でない限り相手はうまくさばき切れていない。

この調子でイーブイの力を十分に発揮させてやり、またソラトがトレーナーとして確かな知識を身につければ、いつかアカリにリベンジできる日がやってくるだろう。

ソラトは、それまでひたすら実力をみがいていくことに決めた。

今までないがしろにしてきたポケモンの知識を、少しずつでも覚

えていくことにした。

なにがなんでも、アカリにイーブイを認めさせてやりたいのだ。
たとえそれが、苦難な道のりだったとしても、だ。

「……ふう、疲れた」

「……ブーイ」

野良試合を受けてくれたトレーナーを見送り、ソラトとイーブイは平原の北端でそろって疲弊ひへいのため息をついた。ソラトは頭を、イーブイは身体を酷使した。
もう、くたくただった。

「……今回のバトル、『でんこうせっか』を使えるようになってなかったら、たぶん負けてたね」

「……ブーイ」

この連戦でイーブイはレベルが上がったらしく、新しい技を使えるようになっていた。

でんこうせっかは、そのうちの一つだった。

もしでんこうせっかを覚えていなければ、さっきのラッタにはいようにでんこうせっかで翻弄され、拳げ句にあの鋭い前歯によって手痛いダメージを負わされていたことだろう。でんこうせっかの速力を回避にも応用したおかげで、最後まで致命傷を受けずに戦いぬくことができたのだ。

まさに、攻守ともに優秀な技だった。

「さて、じゃあさきを急ごうか」

「ブーイ」

休憩もそこそこに、ソラトとイーブイは北へ向かって歩きだす。目指すは、もちろんナゴシタウンだ。

昨日あとにしたポケモンセンターで聞いた話によると、ナゴシタウンまでは三日、遅くても四日ほどあればつけるらしい。

ここからだ、おそらくあと二日ぐらいだろう。

到着したさきで待ち受けているのは、人生で初めてのポケモンジム。

気を引きしめなければならない。

絶対に勝って、ジムバッジを手に入れてみせる。

もしこんなところでつまずいていたら、とてもではないがアカリにイーブイを認めさせてことなんて夢のまた夢だろう。

「ジム戦、頑張ろっね」

「ブーイ」

ソラトは強い決意を胸に、イーブイと北へ進んでいったのだった。

平原をぬけた先にはけわしい山々が連なっていて、まるでナゴシタウンには簡単にたどり着かせないといわんばかりに屹立きつじつしている。日頃から身体を鍛えている大人でも超えるのに苦労しそうな山道を、ソラトとイーブイはせっせと歩いていった。

まわりの茂みしげから、とき折り得体の知れない鳴き声が聞こえてきたりする。

しかも、そろそろ日が傾く時間ということもあってか、辺りは山に入った当初よりもずっと薄暗くなっていて、かなり不気味な様相

をていしていた。

もしイーブイがいなかったら、ソラトは恐怖で泣き出していたかもしれない。

「……疲れたね」

「……ブイ」

肩で息をしながら山道を歩く一人と一匹の声には、まるで力がな
い。

そろそろ体力も限界で、足が鉛のように重かった。

ただし、互いに立ち止まったり、休憩を提案するようなことはし
ない。

それは一刻も早くナゴシタウンに到着したいという思いもあるが、
また別の思いがソラトとイーブイを突き動かしていたからだった。

この周辺はどこも茂みだらけで、そこからいつどう猛な野生ポケ
モンが飛び出して襲ってくるかわかったものではない。だから、た
とえ山の中で一晩すごすことが決定していても、できるだけ安全な
寝床で休息したいのだった。

それも、日が完全に沈んでまったく動けなくなる前に、だ。

この山のことを地図で確認したら、赤いペンで『山小屋あり』と
いう文字がこの道の先に書き込まれていた。おそらく、母がトレー
ナー時代に利用した場所で、だったら自分たちもそこにお世話にな
ろうという魂胆だった。そうしたほうが、野宿するよりもはるかに
安全だろうと判断したからだ。

もうじき日が暮れる。

しかし、どれだけ歩き続けても目当ての山小屋は姿を現さなかつ
た。

それどころか、今自分たちがどこにいるのかも怪しくなってきた。
いた。

豊かな緑におおわれた山は、次第に闇色に染まろうとしている。

「……ブイ」

イーブイが気弱げな声を上げた。

もしかして道に迷っちゃたの、と言ってるようにソラトには聞こえる。

かすかな希望を抱いて地図を見てみたが、口からため息がもれるだけだった。

「……ごめん、このままだったらこの辺りで野宿かもしれない」

「……ブーイ」

今度は、勘弁してよ、だろうか。

とりあえず、ソラトとイーブイは進めるだけ進むことにした。

足が疲労でがくがくと震えているが、それでもしかたなかった。

とにかく、今は寢床を探すことが急務だ。

もしかしたら、運がよければ別の山小屋を発見できるかもしれない。

たとえば、それがはかない希望だったとしても。

「ブイ」

ふいに、イーブイが怪訝そうな声を上げて立ち止まった。

鬱蒼とした茂みが両脇に生えそろう道のさきを、じっと目を凝らして見つめている。

「どうしたの？」

「……ブイ」

歩を止めて尋ねてみると、返ってきたのは警戒心をにじませた低い声だった。

ソラトもイーブイと同じように道のさきに目を向けてみたが、特にかわった様子はなかった。もっとも、イーブイの視力が自分よりも格段にいいのは知っているので、おそらくここからずっとさきに行ったところに、なにか不審なものでも見つけたのだろう。

「これ以上進んだら危なそう？」

イーブイは首を振ってみせたが、それは質問を否定したというよりも、もっと近くまでよってみなければわからないといったニュアンスのようだった。

ソラトはどうしたものかと頭を悩ませる。

上に目線をやると、鮮やかな茜色の空が夜の帳を下ろす準備を始めている。

山小屋を見つけるのであれば、ここでぐずぐずしている時間はない。

「ちょっとだけ行ってみよっか」

「……ブイ」

あまり気が進まないといった感じのイーブイをうながし、ソラトは道のさきへ足を向ける。それからしばらく行ったところで、ようやくソラトの目にもなにかが道の真ん中に居座っているのがわかった。さらに距離をつめていって、今度はその正体も判然とした。

それはポケモンだった。

大きさは幼子と同じぐらいだろうか。人型の白い胴体に、緑の帽

子をかぶったような頭部をしている。額と後頭部のあたりから、丸みの帯びた赤い角が生えていた。

「あれは……？」

ソラトはそれと同種のポケモンを前に一度どこかで見たような気がして、けれど思い出せない。

とりあえず、歩を止めてリュックからポケモン図鑑を取り出した。内蔵された小型カメラを、そのポケモンのほうへ向ける。

すると、女声を模した電子音声が簡単な解説を始めた。

『ラルトス、気持ちポケモン。頭部の特殊な角により、人やポケモンの気持を察知することができる。敵意を感じると、どこかへ姿を隠してしまう』

ああそうだった、と幼いころの記憶がソラトの脳裏によみがえってくる。

たしか母のアルバムを好奇心で覗いてみたときに、若い母と一緒にラルトスが映っている写真が何枚もあった。

過去に見たことがある気がしたのは、おそらくそのせいだろう。

もっとも、そのときのラルトスと違って、この道のさきにいるラルトスはどこか物々しい雰囲気身をまとっていた。よくよく観察してみると、暗くてちよつと確認しづらいが、全身に大小様々な傷跡が無数にあつて、ああそのせいかと納得する。

無惨、という言葉がソラトの胸中に浮かんだ。

おそらく、どの傷も適切な処置をほどこさずにずっと放置していたのだろう。

負傷したらちゃんと治療したほうがいいと野生ポケモンにすすめたところで詮のないことだが、それにしてもあまりにひどい有様だった。

ポケモンセンターに連れて行ってあげたほうがいいかな、という思いが頭をよぎる。

たしか今の医療技術なら、どんな傷跡だって消すことができるはずだった。

何年か前に放送されたテレビの特集で、そんなことを紹介していた記憶がある。

ソラトは逡巡した末に、ゆっくりとラルトスに近づいていった。無用な刺激をさけるために、細心の注意をはらう。と、そのときだった。

『許さない』

まるで頭の中に直接響いてくるような、それは透明感のある声だった。

『殺してやる』

ただ、そんな声には不似合いなほどその言葉は直情的な響きを帯びていて、この世の全てに絶望したような増悪に満ちている。

ソラトは反射的に足を止めて、その場で凍りついた。

足下のイーブイも同じようになっていたことから、おそらくイーブイにもその声が聞こえたのだろう。ということは、それはソラトの空耳なんかではなく、実際に発声されたものということになる。

茂みに誰かが隠れているのだろうか、という考えがまず第一に思い浮かんだ。

しかし、さっきの声は聞こえたというよりも心で感じたという感覚に近いものだった。

それこそ、心と心がじかに対話するような

「……もしかして、『テレパシー』?」

そういえば、とソラトは以前トウヤ博士が楽しみに語っていた話を思い出す。

要約すると、ポケモンの中には相手に直接自分の気持ちを伝える

ことができる『テレパシー』という不思議な能力をもった個体が存在するらしい。エイレン地方の各地で、これまでにそういったポケモンが何体か発見されている報告があるとかないとか。

ソラトの視線がラルトスに釘づけになる。

直感的に、さっきのゾツとする声はラルトスのテレパシーによるものだど悟った。

ここは危険だ、と本能がけたたましく警鐘を鳴らしている。

「……イーブイ」

ソラトはひそひそ声で相棒に呼びかけ、目配せをした。

その意味をイーブイはちゃんとわかってくれたようで、静かに頷いてくれる。

以心伝心。三十六計逃げるにしかず、だ。

これ以上ここにおいては、取り返しのつかないことになってしまいう予感がした。

「いくよ」

その言葉を合図に、ソラトとイーブイはきた道をかけ戻ろうとする。

しかし、それを行動に移すことはできなかった。

ソラトの身体がなにか見えない『力』によって押さえつけられて、ぴくりとも動いてくれないのだ。逃走を図ろうとしていたイーブイが、いったいなにをぐずぐずしてるんだと批難するような目でこちらを見つめていた。

今の自分の状態をイーブイに伝えようとすると、いきなりソラトの身体はその見えない『力』によってすさまじい勢いでラルトスのほうへと引っぱられた。

そのままラルトスの足下の地べたに叩きつけられて、視界に火花

が散る。

うつぶせの体勢でうめくソラト。

まったく、なにがなんだかわからない。

とりあえず、ソラトは痛む身体を起こそうとしてみたが、まだ思いどおりには動いてくれなかった。しかたなく、かろうじて自由のきく目だけを動かして、眼前のラルトスを見上げる。すると、帽子のような頭に隠れていたラルトスの双眸が、増悪の炎をたぎらせてこちらを睥睨へいげいしていた。

背筋に悪寒が走り、肌があわ立つのを抑えられない。

今まで感じたことのない恐怖が、ソラトの全身を包み込んだ。

そんな中で、別の感情が心の片隅に生まれているのに気がつく。

それがなんなのか見当もつかなかったが、なぜか胸がぎゅっとしめつけられた。

妙に身体がざわついて、口の中が苦くなる。

『殺してやる』

また、あのテレパシーが聞こえてきた。

そして

「……………かつ!？」

鉄の塊でものつけたような圧力が、ソラトの背中に襲いかかった。

頭の前から足の先まで地面にめり込み、まるで息ができない。

骨がきしんで、声にならない悲鳴が口からもれた。

どうにかして圧力から逃れようとしてみても、実際に背中になにかがのっけているわけではないので、自力ではどうやっても脱出することはできない。

例の見えない『力』だった。

ソラトはたまらず気を失ってしまいそうになる。

と、ふいにある断片的な光景が頭の中に流れ込んできて、
走馬燈そうまとうのようにかけ巡った。

ソラトと同年代の少年にゲットされる傷のないラルトス。
少年と和気あいあいと戯れるラルトス。
なぜか少年に邪険に扱われるラルトス。

この場所にたたずみ少年が去っていくのを悲しげに見送るラルトス。

この山の野生ポケモンに襲われて傷だらけになっていくラルトス。
それらがいつたいたいなんなのか、またいつたいたいなにを意味するのか、
ソラトにはまったくわからなかった。ただそれら全ては、目の前の
ラルトスが見せていることだけはたしかだった。

さらに他の映像が、頭の中に流れ込んでこようとしている。
しかし、そこまでだった。

「ブイッ！」

『ぐぐっ！?』

くぐもった悲鳴を上げて、ラルトスがふっ飛んだ。
助けに来てくれたイーブイが、ラルトスにでんこうせっかをかま
したのだ。

身体にかかっていた圧力が消え失せる。

ようやく、肺に空気を取り込めるようになった。

「……げほっ、げほっ。ありがとうイーブイ」

「ブイ！」

礼はいいから早くここから逃げるぞと主張するうちに、イーブイ
はソラトの上着を噛かんでひっぱった。

ソラトは満身創痍まんしんそうじの身体にありつたけの力を入れて立ち上がる。視界がかすんでふらつくが、泣き言をいったところでなにも始まらない。

今度こそソラトはここから離れようとするが、無情にも手遅れだった。

ラルトスはすでに起きあがっていて、とても逃がしてくれるような雰囲気ではない。

イーブイは覚悟をきめた顔つきになり、ソラトをかばうように前にでた。

臆病な性格は、ソラトを守るためなら勇気で押さえ込むことができるらしい。

ユウキのときと同じだった。

しかし、あのときと今とでは、決定的に状況が違う。

ユウキにはこちらに危害を加えるつもりはなかったが、今ここで対峙たいじしているラルトスは敵意だけでなく殺意までもむきだしにしているのだ。

とてもではないが、イーブイがただですむとは思えない。

「……イーブイ、ダメだ……」

「ブイ！」

ソラトの制止をふりきって、イーブイは勇ましく敵めがけて突っ込んでいった。

瞬く間にラルトスへと接近していく。

しかし、ラルトスまで後一步のところまで、イーブイの動きがぴたりと止まった。

おそらく、あの不可視の力にイーブイも捕らえられたのだろう。

ラルトスが幽鬼のようにゆらりと揺れた。

そんな相棒の気持ちは純粹にうれしかったが、ただこのままでは全滅だ。

できることなら、イーブイだけでも助かって欲しい。

「お願い……だよ、言うことをきいて……」

しかし、がんとして首を横に振り続けるイーブイ。

それから、キツと目に力を込めると、あるほうへ向かって低いうなり声を放ち始めた。

おそらく、ラルトスのいる方角だろう。

戦っちゃだめだ、と口にしようとしたが、もう呼吸をするのもつらかった。

意識が徐々に薄れていく。

……こんなところで終わりだなんて。

ソラトがそう思ったとき、それはなんの前ぶれもなくやってきた。

「……ラス……きり……」

なにを言っているのかはわからないが、腹の底に響くような野太い声が耳につく。

まもなくして、辺り一面が真っ黒な霧に包まれた。

いったいなにが起こったのか理解できないうちに、ソラトの意識はまどろんでいく。

そして、なにもわからなくなった。

第九話・慟哭の復讐者 <前編>・(後書き)

本作を読んでいただきありがとうございます。

ソラト3度目の気絶・・・こんな災難続きで不憫な主人公って他に
いるのでしょうか。しかも、今にして思えば全て誰かに助けてもら
って窮地から助かるという展開ばかりですね。

でも、考えてみれば10歳で旅をするって結構ハードなことだと思
うのです。

誰かに頼りながらも、挫けずに成長して行って欲しいですね。

次回ですが、ボロボロになったソラトが決意の行動を起こします。
では、また次回にお会いしましょう。

第十話・慟哭の復讐者 <中編>・(前書き)

八話の後書きであと2話でジムのある町にたどり着けそうとか書きましたが、自分の実力不足のため3話になってしまいました。遅筆+文字数計算が下手って小説を書く人としてどうなのよ、って声が聞こえてくる気がします。

少しでも暇つぶしになれば幸いです。

推敲足らずでちゃんと説明できていない部分があったので、ちょっとぴり加筆しました。

どうやら、自分はよほど運に恵まれていないらしい。

ここまでハプニングだらけで、さすがに嫌気が差してくる。

よくまだ生きてるな、と思った。

意識を取り戻したソラトは、かたいベッドの上で横になっていた。少し前から目は覚めている。

しかし、視界が鮮明になりだしたのは、今ようやくだった。

身体は包帯だらけであちこちが痛んで、とても一人では起きあがれそうにない。

しかたないので、目だけを動かして状況がどうなっているのか把握しようとした。

さすがにいつまでも知らない場所でのんきに寝ていられるほど、ソラトはお気楽者ではない。

ここは、小さな部屋だった。

しっかりとした木づくりで、ベッド脇の窓から柔らかな日ざしが差し込んでいた。

もともと寝室なのか、壁際におかれた本棚と机、それから数脚の椅子を除いて他にはなにもなかった。

イーブイはどこに行っただらう、と思っていると、遠くのほうで物音がした。

足音だった。

次第にそれは大きくなっていつて、この部屋の扉の前でとまる。

ソラトは緊張して、ツバを飲み込んだ。

「おお、目が覚めたか」

それは、腹の底に響くような野太い声だった。

部屋に入ってきた中年の男は、にっこりとした笑みを浮かべる。

見るからにいかめしいひげ面だったが、ただしその笑顔はびつくりするほど優しげだった。

男はこちらまでやってくると、いたわるようにソラトの身体を起こしてくれた。

それから、あらかじめ持ってきていた二つの物をこちらによこした。

手で受け取ったそれは、水の入ったコップと小さな赤黒い丸薬だ。おそらく治療薬なのだろうが、まさかそれをすぐに口に含むわけにはいかなかった。

いきなり知らない人からすすめられたものを、おいそれと信用できるわけがない。

「……あなたがボクを助けてくれたんですか？」

とりあえず、ソラトはおずおずとそう尋ねてみた。

男は微笑みながら、鷹揚たうように頷いてみせた。

「危ないところだったんぞ。あれ以上あそこにおつたら、おまえさん死んどつたかもしれん」

そう言われて頭に思い浮かんだのは、あの残虐なラルトスの姿だった。

ソラトの身体がぶるりと震える。

もう二度と会いたくない。

ソラトは窮地きふちを助けてくれた恩人に、心から礼を言った。

「なあに、礼ならこいつにいつとくれ」

男は腰に手を伸ばすと、モンスターボールを一つ取りだした。

開閉ボタンを押して出てきたのは、立派なクチバシをもった黒い

鳥。

たしか、ヤミカラスというポケモンだった。
昔読んだ『魔女の森』という童話で、悪い魔女の手下として登場したのを覚えている。

「ぼろぼろになってたおまえさんを、こいつが空から見つけたんだ」
どうやら、ソラトは鳥ポケモンとはなにか不思議な縁があるらしかった。

さすらいのポケモントレーナーのことを思いだす。

「ありがとう、ヤミカラス」

ソラトはヤミカラスに目を向けてると、感謝の言葉を口にしたら、すると、ヤミカラスは小さくうなづいてから、ぷいっと顔を背けた。気むずかしい老人のような反応だが、おそらく照れ隠しなのだろう。

男がにやにやと面白そうに見ているのがいい証拠だった。

「そついや、まだ名前を教えちよらんかったな。俺ア、トシノリっていうもんだ」

「ボクはソラトといいます」

「うむ、ええ名前だな」

トシノリはそう言うと、あのじゃじゃ馬の面影も残っちよる、と小さくつぶやく。

意味がわからず首をかしげるソラトだったが、その疑問も次の瞬間にはどこかへぶき飛んでいってしまった。

今ではとても慣れ親しんだ鳴き声が、とつとつに聞こえてきたからだ。

「ブイ！」

ソラトは反射的に鳴き声のしたほうへと視線をやった。イーブイは部屋の扉の隙間から顔を出して、うれしそうにふさふさした尻尾を揺らしていた。

「イーブイ！」

「ブイ！」

名前を呼ぶと、イーブイはこちらにかけてきてソラトの胸に飛びついた。

身をよじるような激しい痛みが胸を中心に全身へ広がるが、なるべく苦悶くもんを面にだすようなことはしなかった。甘い声を上げて頬をすりつけてくるイーブイを、ただただソラトは腕でぎゅっと抱きしめる。手に持ったコップの水が少しこぼれたが、気にしなかった。

と、イーブイの顔になにかついているのに気がついた。

つまみ上げてみると、どうやらポケモンフードのようだった。

それから察するに、さっきまでご飯を食べていたのだろう。

ソラトがじとつとした視線をくれてやると、えへへ、といった顔をイーブイはした。

そんなやり取りをしていると、トシノリがぷつと吹きだした。

「がっはっは、まあそんな目で見てやりなさんな。そのイーブイはずっとおまえさんのそばについて心配そうに見守つとつたんだぞ。

ただお腹がすいたみたいでな、ここは寝室だから隣の部屋に飯を用意してやつたんだ」

「ブイブイ」

そうそう、と必死に弁明するイーブイを見て、ソラトはつい脱力してしまふ。

知らない人に用意してもらった食事を、平気で食べていいはずがなかった。

と、そこでふと一つの疑問がソラトの胸によぎった。

あの臆病なイーブイが、なぜかトシノリとヤミカラスにおびえた様子を見せていない。

なぜなんだろうか、とソラトが内心で首をひねっていると

「まあ、再会を喜ぶのはそこまでにして、さっさとそいつを飲んじまいな」

そう言っつて、トシノリはこちらの手元を指さした。

もちろん、そいつとは手渡された赤黒い丸薬のことだ。

ソラトは頬を引きつらせて、丸薬をじつと見つめた。

トシノリには悪いが、あまり気が進まない。

助けてくれたことは感謝しているが、さすがにこの丸薬は得たいが知れなさすぎる。

はつきり言っつて、不気味だった。

ソラトの様子からなにを考えているのかわかったのだろう。

トシノリが呆れたようにこう言っつた。

「なんだ、きのみと複数の漢方用薬を調合してつくつた『鬼薬』を知らんのか？」

「……聞いたことはありませんけど」

その存在は知っていたが、ソラトは今まで実物を目の当たりにしたことはなかった。

さまざまなきのみと複数の漢方用薬を調合して新たな回復薬をつくりだす技術は、大昔にエイレン地方で発祥^{はっしょう}して以来、脈々と現代まで伝えられている。鬼薬はポケモンだけでなく人にも使うことができ、しかも効き目がすごくいいということで評判だった。ただし、その効果とひきかえに悶絶するほど味が悪いらしく、物心がつく前のソラトが高熱をだしたとき一度だけ母に鬼薬を飲まされたことがあったが、そのときは声が枯れるほど大泣きした挙句、数日ほど延々とうがいをしまくっていたとあとで聞かされた。その出来事があったからというものの、母はソラトが病気にかかっても鬼薬だけは絶対に服用させないでいて、だからソラトは今まで鬼薬というものをちゃんと見たことがなかった。

ちなみに、そんな衝撃的な味なせいか、母いわく鬼薬は他の地方ではあまり普及^{ふいきゅう}していないらしい。

「まあ、味はなんだが……おまえさんの今の状態なら、それを飲んどいたほうが楽でいいだろう」

たしかにトシノリの言うとおり、鬼薬を飲めば身体の状態は楽になるだろう。

骨折こそしてなさそうだが、すり傷や切り傷、さらに全身打撲による痛みは想像を絶するもので、ちよつと身動きしただけでも気が遠くなってしまふほどだった。しかも、このまま自然に傷が完治するのを待っていたら、いったいいつになったら旅が再開できるかわかったものではない。ソラトとしては、さっさと治るに越したことはなかった。

「……わかりました」

うだうだとしていたところで埒らちが明かない。
なにより、男らしくない。

ソラトは意を決して、鬼薬を口に運んだ。
なるべく味を感じないように、水で一氣にノドの奥に流し込む。
よしこれなら大丈夫だ、と思った。
しかし

「むぐぐぐうううう!!」

次の瞬間、激烈な苦味やら渋みやら、とにかく味覚の拷問とも呼ぶべき地獄がソラトの舌を襲った。

変な汗が全身から噴きだし、せっかく起こしていた上体が再びベツトに沈む。

口の中がびりびりとしびれて、喋ることも億劫おっくうになった。

良薬は口に苦しとはよくいったものだが、これはあまりにひどすぎる。

とてもではないが、他の地方に普及しないはずだった。

イーブイが驚いたような声を上げ、トシノリを責めるように睨にらんだ。

トシノリは肩をすくめてみせると、空になったコップをもって部屋を出ていく。

ヤミカラスも、彼について退室していった。

「あつううう」

「……ブーイ」

イーブイが気づかうように胸の上から降りて、枕元に移動する。

心配そうな顔をしながら頬をぺろぺろとなめてくれたが、今のソラトにはそれに応えるだけの余裕すらなかった。

舌は阿鼻叫喚あびきょうかんの巷と化し、もはやなにも考えることができなかつた。

そのまま時間だけが過ぎていく。
いったいベットのうえでどれだけ苦しんでいただろうか。

次第に身体がぼかぼかとしてきて、宙に浮き上がったような感覚に包まれた。

鬼薬のシヨックからわずかに脱した頭で、天国からのお迎えが！
……なんて馬鹿なことを思ったりする。

もちろん、それは天国からのお迎えでなく、鬼薬の効果の現れだった。

あるときを境に、すーっと身体から痛みが和らいでいった。
しばらくしてトシノリが部屋に戻ってきたときには、ソラトは自力で起きあがれるまでに回復していた。

まさに恐るべし、鬼薬。
もう二度と飲みたくないけど。

「どうだ調子は？」

「だいぶよくなりましたけど、口の中がいまだ大惨事です……」

「がっはっは、まあ自然にそれもおさまるだろう」

トシノリは椅子を一脚もってきて、それをベットのそばにおいて腰を下ろした。

けっこう恰幅がいいせいにか、木製の椅子は文句を言うようにきしみを上げる。

「それで、おまえさんらはなんであんなところにいたんだ？」

その言葉には好奇心というよりも、どこか批難めいた響きがあっ

た。

ソラトにはその理由がわからなかったが、別に隠すことでもないので話した。

ナゴシタウンを目指すためにこの山に入ったこと。

母の地図を見ながら山小屋を探していたこと。

しかし、その途中で道に迷ってしまったこと。

そして、あのラルトスに遭遇したこと。

トシノリはふんふんと頷うなずいて、なるほどなあと言った。

「あのじゃじゃ馬め……自分の息子をなんだと思ってるんだか」

「え？」

「いんや、なんでもねえ。こつちの話だ」

それから、小さく首を振って、机の引きだしから一枚の地図を取ってきた。

それを、ソラトに見えるように広げてみせる。

「おまえさんが今いるこの山小屋は、ここだ」

「はい」

トシノリが指さしたところは、ソラトが母からもらった地図に書き込まれていた『山小屋あり』の場所よりも、やや東に行ったあたりだった。

「それで、ナゴシタウンに向かうやつがよく使っちょる道は、ここだ」

「……え？」

そして、次に指さされたそこは、いくつも連なるけわしい山々の外周部だった。

「十年以上前はここの山道が主流だったが、五年前ぐらいに外周部にはきれいな道路が整備されてな、今ではそっちが主流になっとる」

「でも、それじゃあかなり時間がかかるんじゃない？」

「普通に歩けば時間はかかるが、途中でヒッチハイクでもすりゃ時間はかからん。それにもしヒッチハイクできんでも、道に迷うこともないし、なによりあのラルトスに出会うこともない」

そのもつともな意見に、ソラトは苦虫を噛みつぶしたような顔を浮かべた。

アカリのことと頭がいつぱいで、早く彼女にイーブイを認めてもらいたくて、そればかり気にしていたせいで、ソラトは他のことがおろそかになっていたのだ。そのせいで自分やイーブイを危険な目に合わせていたのだから、まったく笑い話にもならなかった。

ソラトはこぶしを強くにぎる。

こんなことで失態をやらかして、恥ずかしさでいつぱいになったもつと心にゆとりをもたなくてはいけないと思う。

自分のためにも、イーブイのためにも、もつと広い視野を手に入れないといけない。

あれ？

と、そこでソラトは引っかかりを覚えた。

母から渡されたあの地図には、果たして道路のことは表記されて

いただけるうか。

よく記憶をたどってみたが、たぶんなかったように思う。

「まあ、おまえさんの持つてる地図ってなあ、もうかなり古いもんだろう。母親のちゅうことは、十年以上もまえのもんだろうかなあ」

トシノリのその言葉を聞いて、ソラトの疑念は解消する。

さきほど、トシノリは五年前に道路ができたと言っていた。

それなら、ソラトの地図に道路のことが記されているわけがない。

それは、母がトレーナー時代に使っていた一品なのだから。

それを考慮すると、ソラトはこのままあの古い地図で旅を続けていいものかと思った。

ミシマタウン周辺はここ数十年の間に開発された土地は特になく、自然豊かな風景は昔からほとんど様が変わりしていない。しかし、ミシマタウン周辺のような境界の田舎ではなく、もっと他の地域へと近づいていけば開発された土地が多くなっていくのは想像にかたくなくて、そうなる十年以上も前の地図が役立つになるのは考えるまでもなかった。

今にしてみれば、なぜ母は十年以上も前の古い地図を自分に渡したのか不思議だった。

「ほれ、おまえさんにこの地図をやるから受け取りな。多少これも古いが、旅をするならおまえさんの地図よりは役に立つだろうかな」

トシノリはにかつと笑って、開いていた地図をこちらに押しつけてきた。

一瞬、戸惑うソラトだったが、ここはありがたく頂戴ちやうだいしておくことにした。

これで、少しは安心して旅が続けられる。
ソラトはトシノリに礼を告げた。

「さて、それじゃあ飯にするか。あんだけ眠ったんだ、腹へ
つたろう?」

腹の具合を探ってみると、たしかに空腹だった。

「はい」

「よし、じゃあこっちにきな」

扉をくぐって出て行くトシノリを、ソラトは慌ててベットから降りて追っていった。

身体はまだまだ痛むが、それでも目覚めたときよりは断然、調子がよかった。

唯一、心配事があるとすれば、いまだしびれの残るこの舌でおいしくご飯を食べることができかどうかだった。

ソラトとイーブイは、ともに寝室をあとにした。

山小屋の外は小さな空き地になっている。

そこにテーブルがあって、ソラトとトシノリは席についていた。

テーブルの上にはトシノリアが用意してくれたシチューとパンが並び、ソラトのかたわらの地べたにはポケモンフードの入った器が二つおいてある。

もちろん、イーブイとヤミカラスのものだ。

イーブイはソラトが意識を取り戻す少し前にも一度食べていたが、どうやらそれだけでは物足りなかったようで、別に新しいものを用

意したのだった。

がつつとポケモンフードを頬ばりだす二匹を確認して、ソラトとトシノリも食事を始めた。

雲一つない蒼穹そうきゆうの下で昼食をとりながら、たわいない話がテープルの上を飛びかう。

「えっ、そんなにボクって寝てたんですか？」

話題はベットで安眠していたソラトのことになった。

なんでも、ソラトは丸三日も眠りっぱなしだったらしい。

一日ぐらいはすぎているだろうと思っていたが、さすがにそれは予想外だった。

どつりで、イーブイがトシノリとヤミカラスにおびえていないわけだ。

トシノリとヤミカラスが、窮地を助けてくれた恩人ということもあるのだろう。その三日間で、イーブイは彼らと十分に親睦しんぼくを深めたに違いなかった。

「あのラルトスって、ずっとこの山にいるんですか？」

しびれた舌でもシチューとパンはおいしくて、それらを満足して平らげて一息ついたころ、ソラトは疑問に思っていたことを確認しようとした。

質問されたトシノリは、それを静かに首を振って否定した。

「いんや、数年前に誰かに捨てられたらしくてな」

その言葉を聞いて、やっぱりとソラトの疑問は確信にかわる。

思い出すのは、あのとき頭に流れ込んできたいくつもの断片的な映像。

あれは、あのラルトスが経験した過去の一部分なのだろう。
はあ、とトシノリはため息をついた。

「おまえさん、あのラルトスの記憶を見たりはせんかったか？」

嘘をつく理由がないので、正直に応えた。

「やっぱり見ちよったか。まあ、あんなだけ感情をだだもらしにしてるんだ。見ないほうがおかしいちゅうもんだろうな」

トシノリいわく、ラルトスのような心と深い関わりのあるポケモンは、気持ちが不安定になると得てして自分の感情や記憶が周囲に伝播でんぱしてしまうらしい。そういえば、いつだったか忘れたが、トウヤ博士も同じようなことを言っていた気がした。

「それで、おまえさんはいったいなにを見たんだ？」

「えっと……」

ソラトはあのとときの記憶をなぞり、順を追って話していった。

ソラトと同年代の少年にゲットされる傷のないラルトスのことを。少年と和気あいあいと戯れるラルトスのことを。

なぜか少年に邪険に扱われるラルトスのことを。

あの山道に佇み少年が去っていくのを悲しげに見送るラルトスのことを。

そして、この山の野生ポケモンに襲われて傷だらけになっていくラルトスのことを。

いつの間にか、トシノリの瞳に悲しい色が浮かんでいた。

「まあ、俺が見たのもそんなところだな。ただ、もちっと詳しく見

ちよる」

彼はゆっくりと目を閉じて、自分の見たものを語りだした。もともとのラルトスは、ここからずっと東へいったところにある小さな村の近くに暮らしていたという。

ある日、ラルトスは一人の少年と出会って、そしてゲットされた。この地方では珍しいポケモンということもあってか、ラルトスは少年に大事にされて、片ときも離れることなく一緒にいて、楽しい毎日を送っていた。

しかし、ときがたつにつれて少年はかわっていった。

彼はエイレンリーグを目指すポケモントレーナーだった。

だから、珍しいポケモンではなく、強いポケモンに目がいくようになった。

あまり強くなかったラルトスは、少年の他のポケモンと否応なく比べられて、少年に役立たずのレッテルを貼られてしまった。

しかし、それでもラルトスは耐えて、少年のそばにずっといた。

なぜなら、ラルトスは少年のことが大好きだったから。

そんな思いは、しかし少年にはただうつつとしいだけだった。

とうとう限界になった少年は、この山にラルトスを連れてきてこ
う言った。

おまえなんか、どっかへ行っちゃまえ！

そうして、少年はラルトスを逃がしたのだった。

わざわざ山奥まで連れてきたのは、自分についてこさせないよう
にするためだった。

山奥で一度見失ったら、再び出会うのはとてもではないがむずか
しい。

そんな気持ちでラルトスには手に取るようにわかって、少年が去
っていくのをただ悲しく見送るしかなかった。

ラルトスの心に残ったのは、なぜ自分はここまで弱くておちこぼれなのだろうというくやしさだった。

そんなラルトスは、まもなくしてこの山の野生ポケモンたちの縄張り争いに巻き込まれていった。

実力のなかつたラルトスは一方的にしいたげられ、傷だらけになつていった。

そんな生活が続き、自分の弱さに対するくやしさが少年に対する憎悪にかわっていくのは、もう時間の問題だった。

ラルトスはその憎悪を糧かてにして、強くなつていった。

向かってくる敵を殺す気で返り討ちにして、生き延びていった。

そして、この森でラルトスに敵うポケモンはいなくなったのだつた。

「これが俺が知るラルトスの過去だ。長い間この山に住んでるとな、嫌でもあの映像が頭に流れ込んできちまうんだよ」

再びため息をついて、トシノリは空を見上げた。

「あのラルトスの心が、果たしてこの空のように澄みわたる日はくるんかどうか」

しみじみと口にしたその言葉は、おそらく彼の願いでもあるのだろつ。

ソラトは心中でうずまく感情に、思わず泣いてしまいそうになつた。

今ならどうしてラルトスの憎悪に満ちた双眸そつめつを見たとき、胸がぎゅゅとしめつけられて身体がざわつき、口の中が苦くなったのかわかる。

あのラルトスは、ソラトと似ている。

あの双眸を、ソラトは知っていた。

放っておけない。

理性がやめると叫んでいるが、魂が行けと訴えていた。

「トシノリさん、あのラルトスがいる場所って、ここからどっちですか？」

ソラトがそう言つと、トシノリは怪訝そうな目をした。

「まさか、おまえさん……」

「ボク、あのラルトスのところにもう一度行ってみます」

「おいおい、行ってどうすんだ？」

「わかりません、けど……ボクは行かなくちゃダメなんです」

トシノリはじつとこちらの瞳を覗き込んでくる。

まるで心の全てを見透かされているような気分になって、額にじわっと汗がにじんだ。

自分が馬鹿なことを言っているのはわかっている。

しかし、あのラルトスを救えるのは自分しかないと思った。

それは、とんだ身のほど知らずで、勝手な思い上がりかもしれない。い。

けれど、それでもソラトはあのラルトスを放っておけないのだ。

「……さすがあのじゃじゃ馬の息子だな」

しばしの沈黙のあと、トシノリがやれやれといった感じでそう呟

いた。

そして

「こっから西へ行ってみな。そしたら、昨日の道に行き当たるから、それを左だ」

苦笑いを浮かべて、西の方角に顎をしゃくつてみせた。

ソラトはぱつと顔をほころばせて、頭を下げる。

それから、今まで黙っていたことの推移を見守っていたイーブイに目を合わせた。

「イーブイ、聞いてたよね？ ボクはこれかもう一度、あのラルトスに会ってくる。またひどい目にあうかもしれない。だから、ボクと一緒に来るかどうか、キミ自身が判断してほしいんだ」

「ブイ！」

一瞬の迷いもないそれは、凜然とした鳴き声だった。

決まりだった。

ソラトとイーブイは頷きあうと、西に向かってかけだす。

もう一度、あのラルトスと会うために。

ソラトとイーブイを見送ったあと、トシノリは寝室に足を運んだ。机に向かって座り、引き出しからある一枚の手紙を取りだす。

それは先日送られてきたもので、旧友からだった。

受け取った日に一度読んだが、トシノリはまた目をとおす。

「まったく過保護な母親だよ、おまえさんは。あの子が山に入った

ら見はって、危ないことになったら助けろだなんて」

今もソラトとイーブイに気づかれぬように、こっそりとヤミカラスを空に飛ばして見はらしている。おそらく、またボロボロにされるだろうから、頃合いをみて助けに入らなければならぬだろう。トシノリは手紙から目を離して、窓の外に視線を向ける。

「いんや、むしろきびしいのかね。わざと古い地図を持たしてここやってこさせて、拳げ句にあのラルトスと引き合わせるんだから」

あの子の母親に、ラルトスのことを打ち明けたのがいけなかったのかもしれない。

この展開は、あの子の母親が思い描いたものに違いなかった。

「俺の他に、いったいこんな連絡を何人と取っていることやら」

そっとため息をついて、中年の男は出かける準備を始める。まったく、子守はたいへんだ。

第十話・慟哭の復讐者 <中編>・(後書き)

本作を読んでいただきありがとうございます。

今回、勝手に木の実と漢方を組み合わせてしまったわけですが、実はこれもともと作中にだすつもりはありませんでした。ただ、書いている間にぽつと頭に思い浮かんでそのまま書いてしまった次第です。．．誰かさきに思いついた人がいないか心配です。

さて、ようやく次回で『慟哭の復讐者』は終わりです。これでようやくジムのある町にたどり着けますね。ただ、ちゃんと『慟哭の復讐者』を終わらせることができるか、自信がなかったりします。では、また次回にお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367i/>

ポケットモンスター センチメンタルブラウン

2010年10月9日15時45分発行